

Title	プロレタリア革命文学研究・その一：W・ブレードルの「N&K機械工場」の評価をめぐって
Author(s)	林, 功三
Citation	ドイツ文学研究 (1977), 23: 1-62
Issue Date	1977-08-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/184962
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

プロレタリア革命文学研究・その一

——W・ブレーデルの『N&K機械工場』の評価をめぐって——

林 功 三

ブレーデルの『N&K機械工場』は「赤色一マルク小説」シリーズのひとつである。

「赤色一マルク小説」が発刊された一九三〇年は、ドイツでは大衆運動がきわめてラディカルなものになり、階級闘争の全戦線に革命運動の昂揚がみられた年であった。この年にはマンスフルトとルール、ベルリンとハンプルクでたたかわれたストライキ闘争、各地の農民の反乱、税金不払闘争など、ドイツ全土に怒濤の如く革命的労働運動がひろがった。他方、この三〇年という年は、ドイツ・ファシズムの危険がすでに迫ってきた年でもあった。このような状況のなかで出版されたのが「赤色一マルク小説」である。出版社は、ドイツ共産党（KPD）の「国際・労働者出版所」で、KPDと「プロレタリア革命文学作家同盟」（BPRS）は、政治的解放をめざして闘っていたドイツの労働者階級のために、その闘いの道すじを明らかにするような小説を刊行しようとした。そのために、インターナショナルな社会主義文学と並んで、素材とテーマと思想において真正面から当時の

ドイツの労働者階級の階級闘争をあつかう小説が集められた。「赤色一マルク小説」の第一号はH・マルヒヴィツアの『エッセン襲撃』（三〇年）であり、これに次いだのが、第四号のW・ブレーデルの『N&K機械工場』（三〇年）、第三号のオルシヤンスキーの『戦線の間に』（三〇年）、第二号のK・ノイクラントツの『ヴェイングのバリケード』（三一年）、第五号のF・クライ『マリアと墮胎禁止令』（三一年）、第六号のブレーデル『ローゼンホーフ街』（三一年）、第七号のマルヒヴィツア『炭坑前の闘い』（三一年）、第八号のW・シェーンシユテット『闘う青年』（三二年）がこれに続いた。一九三三年、出版直前にファシストに押収され、戦後はじめて刊行されたオットー・ゴツチュの『三月の嵐』も第一〇号としてその後に出版されるはずであった。

第一号のマルヒヴィツアの『エッセン襲撃』は、一〇年前のカップ一揆のさいのルール炭坑労働者の英雄的な闘争を描いた小説である。二〇年三月、極右のクーデタにたいしてルールのプロレタリアは統一戦線をつくり、共和制ならびにそのなかでの労働者の民主的諸権利を防衛するために、武器をとって立ち上り、反革命勢力を撃退した。いち早くベルリンから逃亡した社会民主党の政府は、この労働者の革命的な闘争のおかげで権力の座に復帰するが、たちまち労働者階級を裏切り、ルールの炭坑労働者を武装解除させ、いままでカップの手先になっていた国防軍を逆に労働者の鎮圧に差し向け、残忍な報復をおこなわせた。マルヒヴィツアの小説は、この間のルール炭坑労働者の闘いを、実さいの闘争に参加した労働者のパースペクティヴから描いたものである。こうして一〇年前のドイツの労働者の闘いを前景に描きながら、この小説は、同時にまぎれもなく二九年のドイツの労働者階級の階級闘争の革命的段階を反映し、その闘争の方向を示唆するものであった。

ノイクラントツの小説は、ストレートにこの時期の階級闘争をテーマにしており、一九二九年の、歴史的なメー

デー事件を扱っている。経済恐慌と政治危機のなかで、社会民主党の警察はベルリンでメーデーのデモを禁止した。治安上の必要というのは——今日歴史の研究によって明らかにされているように——見えすいた口実であった。伝統的権力を奪われまいとしたベルリンの労働者は、ヴェディングやノイケルンで、非暴力の整然たるデモ行進をおこなった。にもかかわらず警察が発砲し、三二名の死者が出た。ヴェディングの一劃にある小さな労働者街（ケスリーナ通り）では、労働者が警察のテロルにたいする防衛戦に立ち上った。ノイクランツの小説は、この労働者たちがどのようにに統一戦線を形成していったかを描いている。社会民主党の本質を完膚なきまでに暴露してみせたこの小説は、直ちに発刊禁止処分を受けたが、当局はその理由として、何ひとつ事実の歪曲や誇張を指摘することができなかった。

この小説は、『エッセン襲撃』や『N&K機械工場』と同様、ドイツ共産党の社会ファシズム論を表現している、といっている。こんにち、当時のドイツ共産党の社会ファシズム論は政治的誤謬であった、という俗説が一般には通用している。トロツキーにはじまり、ブルジョワ反共歴史家、社民の立場に立つ歴史記述からDDRの歴史記述にいたるまで、すべての陣営がこのテーゼを誤まりとしている。しかし、ほんとうにそうであったかどうか、社会民主党の理論と実践の歴史を洗ってみるがいい。またこれをとなえたドイツ共産党の歴史をほんとうにひもといてみるがいい。そうすれば、ドイツ共産党の社会ファシズム論が誤りであったという主張は、歴史のリアリティを素通りする議論でしかないことがわかるであろう。^①

しかし、この小説はむろん「小ツェアギーベル」論の俗流社会ファシズム論を主張したものではない。むしろそのような志向に対し、仮借ない批判をおこなっているのがこの小説である。警察の残忍なテロルを描写してい

るまさにその箇所で、個人テロルの傾向にたいして批判がおこなわれている⁽²⁾。

以上の二つの小説に前後して出版されたのが、ブレーデルの『N & K 機械工場』⁽³⁾である。この小説もまた、当時のドイツの労働者階級の闘いを真正面から扱っている。この小説は——主としてこの小説を例にとりながら、ワイマル共和国末期のプロレタリア革命文学の評価を論じ、その今日におけるアクチュアリティを考えてみよう、というのがこの論文のねらいである——一九二九年、三〇年のドイツ共産党とRGO（ドイツ労働組合総同盟内のフラクション「革命的労働組合反対派」）の政治路線を、小説として表現したものである。

他の赤色一マルク小説も同様であるが、ブレーデルのこの小説は、一口にいつて、きわめておもしろい小説である。そのおもしろさは、高い質をもった大衆小説のおもしろさであり、今日でも階級意識に目覚めた労働者は手に汗を握りながらこの小説を読むにちがいない。

現在の日本でもそうだが、当時ドイツの資本家たちは、経済恐慌の責任を労働者階級に転嫁した。合理化によって、首切りや賃金の引き下げがおこなわれ、同時に社会保障がきりつめられ、失業補助も打ち切られた。資本家の攻撃はすさまじいものであった。資本家の攻撃の前に降伏政策をとる社会民主党と労働組合指導部は、すべての賃金闘争をおさえるのに全力を挙げ、発生したすべての争議を国家権力の手先である強制調停へ持ちこもうとした。小説が示しているように、じじつドイツ労働組合総同盟（ADGB）の幹部は、このころ経営者団体（ドイツ工業家同盟）とその政府を相手にさかんに秘密取引きをおこない、ナチスの政権掌握のために力を貸していたのである。

こういう状況のなかで、ハンブルクのN & K 機械工場の共産党細胞は、資本家による賃金削減に反対し、ファ

シズムに対する労働者統一戦線をつくるために聞っている。RGOの指導するこの闘争は、労働者大衆の背後で経営者をパートナーにして帝政時代の昔からおとくいの秘密交渉をおこなおうとしていた、組合指導部の方針とは真向うから対立する。読者は——洋の東西、古今を問わず——改良主義の組合指導部というものが、労働者をもどのように欺すかを、知るであろう。ブルジョワ新聞がドイツ全属労働組合の「賃金鉄則」をたたえたと、それに呼応して、組合指導部は「現在の経済危機を顧慮して」、正当な賃上げ要求を抑圧する。指導部は、労働者たちが統一戦線をつくって戦おうとしたストライキ闘争をすべて「山猫スト」ときめつけ、一切の闘争をサポートし、逆に圧殺しようとする。

ブレードルの小説は、経営者・組合指導部・治安警察が一体となって金属労働者の経済闘争を弾圧し、ストライキに加わる労働者の抵抗を打ち破ろうとしたことを示している。N&K機械工場の経営者は、旋盤工たちの最終的賃上要求にたいして、全労働者にたいするロックアウトを回答し、組合指導部の援助の下に、スト破りの部隊を組織する。スト破りは、警察に守られながら、RGOのピケットに襲いかかってくる。資本家のためにファシズムへの道をひらいた国家権力がここでもその残虐性を発揮し、警察はピケに立つ一人の労働者を射殺している。このようにして、経営者側は、スト破りを使嚇し、工場の門を突破しようとする。同じころ、ストライキの指導部が逮捕されている。

ブレードルの小説は、このストライキ闘争における、共産党経営細胞の活動をとりわけ詳しく描いている。資本家側のあらゆる攻撃にもかかわらず、経営細胞は、みごとにストライキを実現させ、その中止まで、終始労働者を一致団結させている。

RGOの指導の下に、旋盤工たちは、経営者側から出され、経営評議会がすでに受諾していた、労働時間延長の要求をはねつけ、逆に職場の集会で一五パーセントの賃上げ要求の決議をかちとることに成功する。経営者側は、旋盤工たちのこの賃上げ要求にたいして、「共産党の首謀者たち」の即時解雇という脅しをかけてくる。この挑撥にたいして、RGOの工場委員は、もし経営者側がそれを全面撤回しないばあいには全工場がストライキに入るように、すべての労働者によびかける。組合指導部は、闘争に立ち上ろうとしていた労働者を欺し、労働者たちの知らない間に、経営評議会選挙で多数派を獲得したRGOを除名する。しかし、このような陰謀も労働者の闘争意欲をくじくことはできない。工場の中庭でおこなわれた集会で、ほとんどすべての労働者がストライキに賛成する。

ストライキがどのようにして成立していくか、そのドラマチックなプロセスをブレードルは描き出している。

このあたりが小説の圧巻であろう。ADGBのストライキ基金が利用できないのに、どうしてストライキが可能になるか、国際労働者救援会（IAH）がどのようにして「スーパ大砲」をもってかけつけてくるか、共産党の経営細胞のメンバーが逮捕されたあとでも、どのようにしてストライキの指導が受け継がれていくか、失業者や未組織労働者がどのようにこのストライキに連帯し、統一戦線を形成していくか、そういったすべてをブレードルは、熱っぽさを内を秘めつつ、手がたく描いている。

当時のドイツ共産党によって打ち出された、経済闘争と政治闘争を一体化していくさいの諸原則を、ブレードルはこの小説ではっきりと示している。つまり、組合指導部による、労働者にたいする裏切りは、けっきょく必然的にスト破りの組織化となること。闘争がはげしさを加えてくるなかで、国家権力は、経営者の利潤を守るた

め、必ずストライキに介入し、労働者を射殺するまでになること。ストライキは、最初反対派の工場委員の指導によつてはじまるが、やがて改良主義の指導層が手も出せないような大衆的連帯を実現し、闘う労働者の統一戦線を形成していくこと。また未組織労働者と失業者をストライキの味方に獲得し、資本の攻撃に対して、壮大なプロレタリア民主主義の実現を招来させること。こういった原則をブレードはこの小説で示している。

最後にまたブレードは、ストライキがなぜ打ち切られなければならないか、明らかにしている。このストライキでは、労働者の闘争意欲が強まり、組合指導部の分裂策に対して圧倒的な強さをもつ労働者階級の統一戦線がつくられたのに、なぜこのストライキが中止させられなければならないのかを、ブレードは示している。もし、このハンブルクのN & K機械工場のストライキが、共通の横断賃率にしたがう、北ドイツのすべての金属労働者の間にひろがったならば、このストライキは孤立しなかったであろう。そうなれば、経営者側の統一戦線がこのような個々のストライキを粉砕することに成功しなかったにちがいない。

一九三〇年に発表されたこの小説は、マルヒヴィツァやノイクランツの小説と同様、当時の階級闘争の有力な思想的武器として役立てられたにちがいない。一九三〇年の労働運動史上最大の事件のひとつには、一〇月にベルリンで一八万人の金属労働者によつて闘われた有名な大ストライキ闘争がある。この闘争でも、小説のばあいと全く同様、RGOがその指導をおこない、ADGBの指導部はストライキ破りの組織化を主要任務として引き受けた。RGOの指導するストライキ闘争を余りにもタイミングよく、しかも典型的に描いた『N & K機械工場』は、当時あたかもベルリン金属労働者の闘争に直接かわる一種のルポルタージュのように読まれることも

あったらしい。しかし、じっさいには、ブレーデルはベルリンの金属労働者のストライキに直接関係してはならず、三〇年に獄中であつてこの小説を書いたのであつた。したがつてこの小説は、ベルリンの金属労働者のストライキのルポルタージュではなかつた。むろん、三〇年のストライキのさいにも、すぐさま党の新聞その他にこの闘争に関するルポルタージュや詩が書かれた。党とプロレタリア革命文学作家同盟(BPRS)は、一九二五年——ボルシェヴィキ化を打ち出した第一〇回党大会の年——以来の労働者通信運動をもつていたからである。

というよりはむしろ、BPRSそのものが労働者通信運動の組織化から生まれたものであつた。ブレーデルにしろ、マルヒヴィツァにしろ、ノイクランツにしろ、ゴツチュにしろ、あるいはグリュンベルク、ペーターゼンなど数多い作家が労働者通信運動のなから生長したのである。

しかし、『N&K機械工場』は、従来の労働者通信とルポルタージュ以上のものであつた。

「ベルリンに金属労働者のストライキ運動がおこつた。新聞の文芸欄に、革命的金属労働者の、すなわちRG Oのスローガンをもつた掌篇物語や詩が、ストライキのピケや集会の体験を描くルポルタージュやスケッチがのせられた。これらの文学は、他の勤労者大衆に闘争の生々しい様相とその困難さを伝達するのに、またシンパサイザーを獲得するのに、少なからず役立った。アジプロ隊は、ストライキ集会で、闘争のスローガンを生き生きと示すような寸劇を見せた。つぎに第二の武器がきた。この武器は、前のそれにくらべるとほんの少し重いものであつた。つまり、ストライキがはじまつて数日後に、あるプロレタリア作家によって、ベルリン金属労働者の生活と闘争に関する政治的ルポルタージュが書かれた。これは、大衆に闘争の原因・事実・不可避性を物語形式で示すものであつた。ついでようやく、もうひとつの武器がでてきた。それは、演劇作品と小説という、時間の

かかる、重い武器であった。このようにして、金属労働者の闘争を扱った小説（『N & K機械工場』）が生まれた。この小説はベルリン金属労働者のストライキがきっかけで書かれたのではない、小説はそう早く書かれるはずがない、というのはたしかにその通りである。しかし、この小説は、それと無関係に「偶然」生まれたものではない。この小説は、最近の闘争期の社会的要請のなから生まれたものである。最近の闘争は、革命党とマルクス主義作家たちに、金属労働者のきたるべきストライキ闘争と経済闘争を——ドイツに存在し、今後も予期される経済・政治闘争を——正しい政治的分析によって予告していたからである⁽⁴⁾。

O・ビーハーは 一九三〇年のハリコフ会議でこのように報告している。ビーハーは ここで 『N & K機械工場』の政治的・文学的意義を簡潔に指摘している。『N & K機械工場』は、ドイツの階級闘争の発展のなかから——コミンテルンの指令からではない——生まれたものであること、小説という文学形式をもつこの作品は、ルポルタージュよりも「重い武器」で、新たな政治的アクチュアリティをもつものであり、それがいままさに必要になったこと。

しかし、アジプロの小形式文学にたいして大形式の小説がよりアクチュアルな政治的機能をもつ、ということは、いったいどういうことであつたらうか。ルポルタージュ以上に「重い武器」である小説が有効である、というのは、いつの時代にも通用するジャンルの法則だろうか。それとも、それは、一九三〇年前後のドイツ・プロレタリア革命文学にのみ限定される、政治的内容と文学形式の関係だったのだろうか。そういった問題を以下に少し考えてみたい。

その前に、『N & K機械工場』のような小説は、現在どのように読まれているであろうか。先ずそれをみてお

こう。

西ドイツでは現在『N & K 機械工場』のようなプロレタリア革命文学の作品は——それが読まれているかぎりではあるが——奇妙な読み方をされている。ヘルガ・ガラスやフリッツ・ラダッツのような「マルクス主義文学者」たちは、ブレーデルの小説をもっぱら文学論争の材料としてとらえ、いわゆる「ブレヒト||ルカーチ論争」の枠の中で問題にしている。

たとえばガラスによれば、ルカーチが「閉ざされた形式」のリアリズム論を固執した批評家であったのにたいし、ブレヒトは「開かれた形式」の文学的革命家であった。ルカーチが正統マルクス||レーニン主義の党官僚であったのにたいし、ブレヒトは弁証法のパルチザンであった。ルカーチがモスコウに繰られたヘーゲル主義者であったのにたいし、ブレヒトは共産主義運動の異端家（コルシュ）に学んだマルクス主義者であった。ルカーチが、コミンテルンの意を体して硬直した人民戦線政策を強制し、プロレタリア作家やブルジョワ出身の革命的インテリ作家によって試みられた創意工夫に富んだ文学的実験に有害な影響を及ぼしたのにたいし、ブレヒトは、ブルジョワ前衛芸術をも生かし、反ファシズム人民戦線を実現していくのに力をかけた。ブレヒトとルカーチの間には大ざっぱにいうとざっとこんなふうの対立関係があるとガラスらはみている。かれらは、二九年・三〇年に現実に闘われた政治的・経済的階級闘争、『N & K 機械工場』が例示しているような、共産党の経営細胞の活動やストライキの組織などにはもともと何ら積極的な関心をもっていないが、ブレーデルの小説は、多くのプロレタリア文学のルポルタージュ作品と同様、「開かれた形式」の文学であり、そのためにルカーチに拒否された

として、その限りにおいてこれがある程度評価する。しかし、小説の政治的内容は、むしろこれらにとっては、ドイツ共産党の「破局的政策」（フレヒトハイム）のドキュメントでしかない。ドイツ共産党は、その救いようもないみじめな社会ファシズム論によって、社会民主党やブルジョワジーの民主的勢力との統一戦線を排除する誤謬を犯した。ドイツ共産党の提起した統一戦線政策は、余りにも独裁的な性格が強く、そのなかで革命的インテリゲンチヤやプロレタリア作家は自由な発言を許されなかった、というような観方をかれらはしている。このようなデマゴギーを可能にするためにかれらが依拠する歴史記述は、アルトゥア・ローゼンベルクやフレヒトハイム⁽⁶⁾などのそれであり、ブルジョワ的・自由主義的ないしは社会民主主義的立場から歪曲され、偽造された歴史記述である。かれら自身もまたそのような歴史記述に従った文学論を展開することによって歴史の偽造に一役買っている。

ガラスらの文学理論の方法は、現実の労働運動史を無視するところに著しい特徴をもっている。ガラスによると「マルクス主義文学理論の根本問題」は、文学形式はどのような要素によって変化していくものであるか、という問題である。すなわち、「内面独白、叙事演劇、十二音音楽などは、どのように評価されるべきだろうか。これらはすべて、独占資本の時代のブルジョワジーのイデオロギー的頽廢の『表現』とみられるべきだろうか。これらの新しい芸術形式の出現とそれを生み出した階級との間には、ルカーチが『……の表現』と呼んでいるような因果関係がはたしてあるだろうか。むしろ、この変化は、芸術形式の発展のプロセスにおける必然的な段階ではないだろうか。この歴史的プロセスは、ひとつの階級の（ないしは、その階級に属する作者の）意識段階によって規定されるようなものではなく、イデオロギーからは相対的に自由な領域、たとえば再生産とコミュニケーション

ーションの技術の歴史的段階や、（ある程度その歴史的段階によって規定される）芸術の受取り手の社会的構造や欲求などによって規定されるものではないだろうか。また、この新しい芸術形式は、それが最初に用いられたときの関係からやがて切り離されうるものだろうか。それとも、その最初の関係によって後のちまで制約されたがって『墮落』^{デカダンス}とならざるをえないものだろうか？」

芸術形式の変化に関するこのような問題意識をもって、ガラスは「下部構造Ⅱ上部構造の図式における芸術の位置づけ」を明らかにしようとする。「いいかえれば、肝心な問題は、当時も、そしてまた今日においても、新しい芸術形式の成立とその芸術形式の存在と意識への依存という問題である。芸術の生産過程においては何が『存在』とみなされるべきか、下部構造Ⅱ上部構造の図式において芸術の位置づけはどうなるのか、という問題である。⁽⁸⁾」

このようにして、ガラスは、マルクス主義文学理論をもっぱら芸術形式の変化の問題に限定してしまい、階級闘争と文学の関係を完全に無視している。プロレタリア革命文学の研究から階級闘争と文学の関係がどのように説明されるか、プロレタリア革命文学は革命闘争にとってどのような機能をもちえたのか、といった問題はとごとくかの女の関心の外にある。ガラスの「マルクス主義文学理論」は、政治と文学の関係から出発するのでなく、芸術形式の変化と「物質的生産力の発展とその段階」との関係を考察の根底において、そこから出発しようとしている。ガラスは、かの女の書物のいわばモットーとして、DDRの作曲家ハンス・アイスラーのことを援用する。

「芸術形式は芸術家の所属する階級のイデオロギーの発展段階から生まれる、というルカーチによって公認の

マルクス主義の見解になったテーゼにたいし、アイスラーはちがったテーゼを出している。芸術形式の発展は、物質的生産力の発展とその段階によって決定される、とアイスラーはいう。『ハンマークラヴィアの出現はチェンバロとはちがう音楽を可能にした。ヴァーグナーの音楽はヴェンティルホルンなくしては考えられない。現代においては、映画・レコード・ラジオなどによって、また芸術の社会的伝達形態の変化によって、新しい芸術生産の問題が生じている。この問題は、ベートーヴェンの偉大さや独占資本の腐敗が引合に出されたところで、一向に解決されない問題である。』⁽⁹⁾

ガラスは、このようなアイスラーの考え方には「ルイ・アルチュセールの構造主義の自律的思想と一脈通じるものがある」ということばで、かの女の書物を結んでいる。⁽¹⁰⁾

ガラスのばあい、このようにして、文学・芸術においては形式の優位性が決定的なものとされている。ルカーチ||ブレヒト論争のばあいでも、「開かれた形式」か「閉ざされた形式」かが決定的な問題とされている。そしてその何れが「左翼的」であり、何れが「右翼的」であるかは、その形式が技術的生産力の発展段階に応じたものであるか否かによってきまる、というのである。

しかし、マルクス主義の文学理論においては、形式ではなく、内容こそが優先する。プロレタリア革命文学についていえば、プロレタリアートの革命的階級闘争に役立つ文学はどのような内容をもつ文学であったか、そして次に、その内容にふさわしい形式はどのようなものであったか、という風に問題が立てられるべきであろう。形式は、内容と同じく、けっして自律的なものでなく、あくまで政治的に規定されている。ルポルタージュか小説かは、そのときどきの階級闘争の段階に応じてきまってくるものであり、何のために、誰に宛てて書くのか、

よってきまってくるものだ。労働者通信運動とルポルターージュが第一〇回党大会（一九二五年）の決議に基づくものであり、党の組織活動と不可分なものであったとすれば、二九年・三〇年に階級闘争が新しい段階に入り、そのために出てきたのが「赤色一マルク小説」であった。二九年・三〇年のプロレタリア革命文学にとっては、二九年・三〇年の階級闘争こそが決定的だったのであり、まさか二九年・三〇年の技術的生産力（ノ）が決定であつたわけではあるまい。

ガラスの理論は、プロレタリア革命文学にたいする無理解以外の何ものでもない。このことは、ガラスがKPDとBPRSの関係を問題にするのをみるとき、一層あきらかになる。『N&K機械工場』を考察の対象とするこの論文ではいささか廻り道にすぎるが、ガラスの「マルクス主義文学理論」批判をおこないながら、ドイツのプロレタリア革命文学のなかで赤色一マルク小説のシリーズがなぜ生まれてこなければならなかったのかをひきつづき考察してみよう。

一九三〇年三月号の『リンクスクルヴェ』で、ヨーゼフ・レンツ（KPDのアジプロ部の指導者）は、BPRS内部における左翼日和見主義にたいする批判を書いている。⁽¹⁾それは、一カ月前の二月号にのったエーリヒ・シュテッフェンの論文『プロレタリア文学の原細胞』⁽²⁾をとり上げたものであった。シュテッフェンは、この論文で、党の六〇〇もの経営新聞における労働者通信運動の拡大を引き合いに出しながら、「われわれには、プロレタリア文学をつくり出す必要はない。われわれはそれをもっているのだ。」と書いていた。「弁証法的発展のなかで、独自のプロレタリア文学の新しい原細胞が生まれてきており、この文学においては、被抑圧階級の解放闘争がじ

つに多彩な形式で描き出されている（……）この力は、生産点において、機械であろうと、坑山であろうと、織機であろうと、階級が直接敵対し、ぶつかりあうところならどこでも、かならず示される。しかし、こういう事件の文学的反映は、どこか高い立場からなされるものではなく、直接労働者自身によってなされるものである。（……）階級闘争の産物である経営新聞は、同時に新しく芽生えつつあるプロレタリア文学を担い、ひろめるものでもある。」そうシュテッフェンは書いていた。

『リンクスクルヴェ』の編集部は、ガラスが事実を曲げて書いているように、シュテッフェンのこのテーゼに全面的に同意していたわけではけっしてない。反対に、編集部は「われわれは、この論文を討論のために載せる」とわざわざコメントをつけている。したがって編集部はむしろシュテッフェン論文に批判的であったといつてさしつかえない。

ガラスは、BPRS（とKPD）が、それまで「新しい文学の原細胞である労働者通信にのみもっぱらかかわってきた」のに、三月のレンツの論文とともに右へ路線転換をした、といっている。⁽¹³⁾ 実さいには、三月にドイツ共産党は政治路線の転換など全くおこなっていないし、『リンクスクルヴェ』にも路線の変更は全くみられない。このことは、KPDの歴史を、またBPRSの歴史をひもといてみればわかる。

早い話がたとえば、『リンクスクルヴェ』をのぞいてみるだけでもいい。一九三〇年一月号の同誌では、ベッヒアーが『さらにもう一步前進せよ！』という論文を書いている。ベッヒアーは、プロレタリア革命文学作家同盟のこれまでの仕事を総括し、あらためて綱領問題を取り上げ、同盟のかかえているさまざまな課題を説明したのち、いま何よりも重要なのは「廉価な、プロレタリア大衆文学を創造すること」である、と書いている。⁽¹⁴⁾

同じ号で『リンクスクルヴェ』は「プロレタリアートの困窮とその日常闘争を無条件で引き受ける、階級闘争の文学」をさらにもう一歩おしすすめるために、懸賞募集をおこなっている。「プロレタリア革命文学はまだ若く、未発達段階にある。その内容と形式の諸問題もまだ十分には解決されていない。まだ多くの作家たちがアウトサイダーの立場に留まり、真の革命的・創造的文学へ通じる苦難の道を歩むことを恐れている。プロレタリア革命文学作家同盟は、いま諸君からプロレタリア革命の小説を、われわれの時代の重要な闘争と本格的に取組んだ小説を期待している。また、いまわれわれの舞台は、一晚じっくり時間をかけて上演されるプロレタリア革命演劇作品を期待している。ルポルタージュ、短篇小説、プロレタリア革命の抒情詩のほとんどすべての領域も、まだ第一歩が踏み出されたばかりである。農村労働者や工場の生活を描く演劇作品、小説、物語、ルポルタージュがいま必要である。経営細胞を描く作品、情宣活動やアジプロ隊の活動を描く作品がいま必要である。プロレタリアの都市居住区の生活、その闘争、ストライキ、労働者階級の経済的・政治的決戦を描いた作品がいまわれわれには必要である。

それゆえ、『リンクスクルヴェ』は、すべてのプロレタリア革命文学の作家に（同盟員以外の作家にも）、労働者通信作家と経営新聞の執筆者たちに、この懸賞競争に参加することを求める。

すぐれたプロレタリア革命文学作品には、次のような賞が与えられる。

小説に

二〇〇マルク

演劇作品に

二〇〇マルク

物語に

一〇〇マルク

ルポルタージュに

五〇マルク

詩に

四〇マルク

三篇のすぐれた掌篇物語にそれぞれ

二〇マルク

宛先Ⅱ『リンクスクールヴェ』ベルリンⅡリヒテンベルク、キールブロック街一a、ルートヴィヒ・レン氣付¹⁶」
こうした記事を読むとき、B P R Sが「新しい文学の原細胞である労働者通信にのみもっぱらかわって
きた」などとしていえるだろうか。ガラスは、明らかに『リンクスクールヴェ』誌の検討さえもろくろくし
ないで、三月に、レンツの論文と同時に党とB P R Sが「突然路線を右へ方向転換した」と主張しているのだ。

懸賞のテキストの、小説 ドラマ 物語——というこの順序にも注意したい。この後にやっとルポルタージュ、
掌篇物語という労働者通信の諸形式がおかれている。まさにガラスの主張とは正反対である。一月号では、ルポ
ルタージュでなく、小説とドラマが優先されているのだ。

そもそも、小説かルポルタージュか、というのは何も二者択一ではない。時代の政治的局面的なかで、それぞ
れのジャンルがその機能に応じて要求されるにすぎない。その必要性にたいするガラスの無知は、革命闘争の組
織活動にたいするかの女の無知と軌を一にしている。

『リンクスクールヴェ』の三月号では、レンツがシュテッフェンの論文をとり上げ、「階級闘争の経済主義的理
解」と呼んで、批判した。「われわれが必要とするプロレタリア文学は、人間社会の全生活を、すべての階級の
生活を、革命的プロレタリアートの立場から反映するものでなければならぬ。革命的プロレタリアートの立場、
それは、賃金と労働条件に不満を抱いているプロレタリアートの立場ではなく、マルクスⅡレーニン主義者の立

場であり、現行社会秩序の内部構造、その内的矛盾、そのおどましき、その没落の必然性を、明確に把握するものでなければならぬ。」とレンツは書いている。⁽¹⁶⁾このような論文の内容からいってどうしてガラスのいうように「突然路線を右へ方向転換した」などと結論できるというのか。ガラスは、BPRSが「新しい文学の原細胞である労働者通信にのみもっぱらかわってきた」というテーゼを、『リンクスクールヴュ』の検討もろくすっぽししないで提出していたばかりでなく、レンツの論文の内容をまともに検討しないで、BPRSとKPDが「突然、路線を右へ方向転換した」といつている。

レンツの論文にガラスは「インテリ」の「パイオニア的役割」の強調をみている。レンツは後のルカーチの論文を先取りしている、とガラスは考えている。「この意味でレンツは、労働者通信作家は階級闘争のなかで有用な仕事をするかも知れないが、だからといってつけてつけてプロレタリア文学を創造できるわけではないことを、確認した。『労働者通信と経営新聞をプロレタリア文学として讃美する態度の背後には、ほんとうは、革命的興隆期のブルジョワジーが創造したような偉大な芸術作品を創造できないプロレタリアートにたいする、軽蔑がひそんでいる。』⁽¹⁷⁾」

ガラスによれば、プロレタリア文学の発展は労働者通信のプロレタリア作家だけでは到底不可能で、ブルジョワ・左翼インテリの協力をまっただけのみ可能であった。だから、ブルジョワ文学の消化吸収が先行しなければならなかった、とガラスはいい、このあとすぐ続けて「このような突然の路線変更をもたらした理由については、党中央委員会の関係文書に目を通したとき、はじめて決定的なことがいえるようになるだろう。」と書いている。⁽¹⁸⁾

労働運動の歴史を知る者ならだれでも、革命的労働運動の組織の内部において克服されなければならない路線

のひとつに、むかしから経済主義があったし、またあることを、知っている。これはマルクス主義＝レーニン主義のいわばイロハである。⁽¹⁹⁾一九三〇年にテールマン共産党とBPRSがとり組んだのもこの問題であった。レンツの論文も、労働運動の歴史のなかで繰返し現われてくる、左翼日和見主義的・経済主義的偏向にたいする、正当な批判であった。一九三〇年に、プロレタリアートの歴史的使命はまさに全社会の変革であること、プロレタリアートの他にも貧窮化した農民や小市民層のような被搾取階級・被抑圧者が存在すること、したがってかれらを同盟者として獲得する必要があることを説いているレンツのシュテツフェン論文批判は、マルクス主義・レーニン主義の革命理論に正しく立脚するものであったといっている。一九二九年には、また三〇年にもまだ、プロレタリア革命のアクチュアリティは歴史の日程にのほっていた。だからこそ、KPDにとって同盟政策はアクチュアルな課題であった。この同盟政策は、三二年夏の「アンティファ」とは多少次元を異にする。ましてや、三〇年代後半以降のKPD・コミンテルンの路線と同一視することはできない。⁽²⁰⁾

ガラスによれば、一九三〇年二月までドイツ共産党は左翼偏向路線をとっていたという(多少なりともドイツ共産党史を研究してみればわかることだが、これは全く事実反している)。またガラスによれば、三〇年三月にドイツ共産党は突然右寄りに路線転換したという(かの女のいうような路線転換など現実には全くなかった。革命運動と同盟政策を二者択一的にしか考えないかの女の無能力が、このようなテーゼを可能にしているのだ)。ガラスは、レンツの論文の最も本質的な部分を無視し、この論文に右翼的偏向をみている。

それだけではない。かの女は、歴史の歩みを陰謀の仕わざとみている。「党中央委員会の関係文書に目を通したとき、はじめて決定的なことがいえるようになるだろう……」⁽²¹⁾これがかの女の歴史理解である。ガラスのよう

な「マルクス主義文学理論」家の目には、BPRSは、ドイツ共産党の「厳格な」「教条主義的な」指令に従う文学者団体、「ブルジョワ的世論の前に評判を落とすこと」をおそれていた作家集団として映っている。

レンツの論文を理解するのに、ひとは中央委員会の秘密文書やパーナソルな人間関係を嗅ぎ廻る必要など毛頭ない。ほんのわずかでも歴史を、労働運動史を、ひもといてみればいい。

一九二九年一〇月、経済恐慌は、ヨーロッパのなかでもとりわけドイツをばげしく襲った。階級闘争は激化した。一二月に発表された全国工業者連盟の覚え書『興隆か没落か』にみられるように、ドイツの帝国主義ブルジョワジーは、恐慌の影響を勤労者に転嫁する方針を打ち出した。独占利潤を保証し、つり上げるため、かれらは国家措置を要求した。資本家の税金引下げ、大衆課税の引上げ、社会的給付の削減、賃金や労働条件を決定するさいの企業家に対する制限条項の廃止などがそれであった。狂暴な合理化がおしすすめられ、三〇年一月には失業者の数は三二〇万を数えていた。小市民層もひどい打撃をうけた。小農民層も借金に苦しめられ、絶望の淵に追いやられた。二九年八月のシュレースヴィヒ＝ホルシュタインの農民運動はそのあらわれであった。こういう状況に乗じて、ナチスはその勢力をのばしてきた。二九年一二月、ナチスはバイエルンとテューリンゲンの地方選挙で最初の勝利をおさめた。

このような状況のなかで、ドイツ共産党は、一方では経営細胞を強化し、他方ではプロレタリアートの同盟政策のパートナーとなりうる小市民ならびに農民層への働きかけを積極的におこなおうとした。三〇年の初めには多くの州で農民委員会がつくられている。すでに二九年秋、党中央委員会は、中間層にたいする働きかけがまだ不十分であることを指摘し、その改善を実行することを決議しており、この決議は着々と実行に移されていた。

一九三〇年三月、ベルリンでは、勤労農民のヨーロッパ会議がひらかれ、これに二〇人のドイツ代表と六二人代の表が出席した。「コミンテルンの西ヨーロッパ事務局の指導者であるG・デミトロフの指導と協力の下に、会議は、労働者と勤労農民の同盟の必要性を強く訴え、独占資本と大土地所有、税ならびに小作料の引き上げ政策、階級裁判、ファシズム、再軍備に反対する闘いを要求した。」⁽²⁾

一九二九年一〇月に結成された「労働者文化連盟（IfA）」も、党のこのような政策を文化運動の次元で実現するためのものであった。BPRSのはかに、革命的造型美術家協会、労働者劇団同盟、プロレタリア無神論者同盟内反対派、人民演劇運動内反対派、労働者ラジオ同盟、人民映画芸術連盟、労働者歌手連盟、学制改革同盟……などがIfAに参加した。

レンツの論文を理解するのに、中央委員会の秘密文書を探し廻る必要はなく、ルカーチと一部の党幹部やコミンテルンの「大物」との隠されたパーソナルな関係をさぐる必要も全くないことがわかるであろう。三〇年六月の中央委員会で最終的に検討され、八月に全世界の人びとの前に発表された『ドイツ人民の国民的・社会的解放のための綱領宣言』にみられるような、当時のドイツ共産党の革命的戦略こそが、レンツの論文の根底にあるものであった。この革命戦略の問題を、単なる文学形式の問題にすりかえているのが、ガラスのような「マルクス主義文学理論」家の仕事である。新左翼の学生たちに人気のあるかの女の「業績」は、りっぱに現代の消費商品のひとつに数えられるものであるにちがいないが、ほんとうの学問とは余り関係がないようだ。

一九三〇年初頭の歴史的状況を、こともあるうに「ワイマル共和国の安定化」とみているのがBRDの「マルクス主義文学理論」家である。ガラスは、レンツの論文に党の路線の右への修正、革命目標からの離反をみてい

るが、その理由は、「シンパのインテリたちや、動揺する小市民、農民たちが、このような文学とそのラディカルな要求によって、おじけさせられたり、過度の要求をつきつけられたりしてはならなかった」からだ、という。当時『処置』を、さらには『母』を書いたブレヒト、ブルジョワ階級の出身でありながら、万人の前で自己批判をしつつプロレタリア革命文学運動をおすすめしたオットヴァルトやルートヴィヒ・レン、かれらは「ラディカルな要求によっておじけさせられ」たインテリだったろうか。ベッヒアーをはじめ、多くのプロレタリア革命文学者たちが、インテリにたいして、仮借ない批判をおこないながら、その最もすぐれた部分（トゥホルスキー）を同伴者として獲得することに成功しなかったらうか。

「ワイマル共和国の安定化とともに、近い採来におけるプロレタリア革命の勝利の眺望が失われたので、KPDにとっては、目覚めたプロレタリアに、さしせまった、もしくは将来の、行動の準備をさせることはもはやそれほど重要なことではなくなった。むしろ、無党派の市民やSPDの支持者、小市民などを党の政策のために獲得することの方が重要になってきた。革命へのよびかけをおこなう文学、工業プロレタリアートの意識的な部分へ焦点を合わせる文学によっては、このような党の政策目標はもはや達成されえないものとなった。したがって、先述のヨーゼフ・レンツの論文において、一九三〇年三月、プロレタリア革命文学は二つの点で修正を受けることになった（……）文学のプロレタリア的・革命的性格に関するレンツの規定は、これまで『リンクスクルヴェ』で述べられてきたすべての見解を修正するものであった。規定の標識で新たに外されたのは、作家の素姓、目覚めたプロレタリア読者にのみ焦点を合わせること、プロレタリア的主題（経営・労働者生活）を扱うこと、特定の、プロレタリア的な意識構造の再生産などであった。」とガラスは書いている。⁽²⁴⁾こうして、レンツの論文を、

倒錯したその「新しい」構造主義的「文学理論」の観点からみようとするとするガラスは、「レントツは、プロレタリア革命文学がプロレタリアートの階級意識にめざめた前衛の文学であるという見解を、否定した」とさえ書いている⁽²⁵⁾。このような主張が全くのデマゴギーであることは以上の叙述からもう明らかであろう。BPRSは、ガラスのテーゼが全くのうそっぱちであることを実践によっても示している。赤色一マルク小説の刊行がそれである。

こうして現在の西ドイツでは、プロレタリア革命文学、とりわけわれわれが扱おうとする『N&K機械工場』のような赤色一マルク小説は、ほんの一部のゲルマニストを除けば、一般には問題にもされず、とり上げられるばあいには、ガラスにみられるように、完全に歪曲されている。前衛党に指導されるまともな労働運動が十分におこってこないところでは、これも怪しむに足りないのかも知れない。

では西では『N&K機械工場』のようなプロレタリア革命文学の小説は拒否されているとすれば、東ドイツではどうか。

DDRでは、『N&K機械工場』は一九六一年と一九六五年に二度刊行されたきり、それ以後もうずっと刊行されていない。同じブレーデルの作品でも、『父たち』『息子たち』『孫』の三部作や『試煉』など、大戦中やDDRの中で書かれたいわゆる「反ファシズム・民主主義」の小説はちがう。『父たち』は二十数回、『試煉』は一〇回も版を改めて刊行されている。『N&K機械工場』と同じことが他の赤色一マルク小説、たとえば上述の『エッセン襲撃』や『ヴェディングのバリケード』についてもいえる。シェーンシュテットのように大戦後アメリカに渡った作家の作品についてはいうまでもない。総じて現在のDDRでは、一九二八年——三二年のプ

ロレタリア革命文学は、ライプツィヒのA・クラインら少数のグループのゲルマニストによる特殊研究⁽²⁶⁾としてまとめられているにすぎず、ドイツ文学研究のなかでの主流とはみなされていない。このことはまた、最近DDRから出版されている文学史の記述をみてわかる。

DDRでは、ブレーデルやマルヒヴィツァらの、あの時代の文学は、芸術的に未熟であった、とよく研究書などに書かれている。芸術的未熟という批評のかげには、じつは、一九二八―三二年のドイツ共産党の「極左」的——とDDRではみなされている——政治路線にたいする批判がひそんでいる。二八―三二年の時期のテールマンやウルブリヒトの著作がDDRでは出版されていないのも、同じ理由からでなければいい何であろうか。RGOの「極左」的路線を文学的に表現した『N & K 機械工場』、社会ファシズム論の小説である『ヴェディングのバリケード』、二九年のドイツ共産党の「冒險主義的」路線の正当性を強調し、軍事行動の重要性さえもを示唆しているようにみえる『エッセン襲撃』——この小説は戦後DDRでほとんど別の小説とっていいほどに書き改められ、五二年に出版されている。ラディカルな第一版と、緩和され、温厚なものになっている第二版とでは、小説の政治的意図が全くちがっている⁽²⁷⁾——などが、現在のDDRで拒否されているのには、それなりの政治的理由があるからだ。

赤色一マルク小説は、政治的には人民戦線政策の高みに達しておらず、文学的にも「国民文学」の高みに達していない、というのがDDRの文学史における定説的評価であろう。周知のように、戦後に至るまでプロレタリア革命文学を抑圧するためにだれよりも大きな貢献をしたのは、ルカーチである。ワイマル共和国時代のプロレタリア革命文学は、文学評界に君臨するこの学者によって「美学的に未熟」という烙印を押され、抑圧された。

むろん、しかしそのようなことは、ルカーチによる文学理論の独占というような現象として説明できることではなく、三〇年代後半のドイツ共産党ならびにドイツ社会主義統一党（SED）の路線が、かなりの程度までルカーチの理論と一致していたからこそ、ありえたのである。

DDRでは、五〇年代にはまだそれでも、いわゆる二つの路線の闘いがはげしくたたかわれていた。五六年は、ソ連共産党第二〇回大会とSEDの第二一回中央委員会の年であったが、同時にハンガリーとポーランドの事件の年であり、DDRのなかでも労働者の不満が高まっていた。ひとたびSEDの政治路線に変動がおけると、文学の評価にも大きな変動が生じる。ハンガリー事件のさい、ルカーチが修正主義者としての本質を政治的に暴露したのと同じころ、DDRの中でも五七年から一種の「文化革命」がはじまり、いわゆるビッターフルトの道がひらかれた。このとき、ハンス・コッホや、ハンス・カウマンらのルカーチ批判と軌を一にして、文学史研究でもプロレタリア革命文学の積極的評価がはじまり、リベラリズムと雪どけの文学にたいするたたかいが開始された。こんにちわれわれに残されている重要なプロレタリア革命文学に関する研究やドキュメンテーションの仕事——「赤色ディーツ・シリーズ」⁽²⁹⁾、『社会主義ドイツ文学辞典』⁽³⁰⁾、前述のクラインらのいくつかのすぐれた仕事——が発表され、またその成果の基礎が築かれているのは、主として五九年から六四年までの前後二回のビッターフルト会議の間の時期である。

しかし五〇年代の後半、とりわけ六一年——ソ連共産党第二二回党大会の年——以降は、これとは反対の傾向の方がはるかに強くなってきている。現実存在する国内の階級対立を一切否認して、資本主義的価値法則を貫徹させ、ひたすら生産力の発展を誇るのが、DDRの主な政治路線となってきた。いまここでDDRとSEDの歴

史を詳しく論じることにはできないが、その主たる政治路線がとめどもない修正主義のそれであることだけは断言してはばからない。⁽³¹⁾ 政治路線の修正に応じて文学の分野でも六〇年代とりわけその後半には様相が一変してきている。最近ではDDRの作家たちは、その作品に、時代おくれのプロレタリア独裁の問題や階級闘争の問題をとり上げたりしないで、個人の内面的葛藤や成長をテーマに好んでとり上げるようになってきている。文学研究や文学史の叙述においても、ブルジョワ文化の遺産がますます重要視されるようになり、ブルジョワ古典文学だけでなく、表現主義文学や自然主義文学の作品がさかんに息を吹きかえして、刊行され、カフカやリルケの文学の再評価が試みられたりする。そういうなかで二八年——三二年のプロレタリア革命文学が正当に受けとめられるはずがない。

現在のDDRにおけるプロレタリア革命文学の消極的・否定的評価は、テールマン時代のドイツ共産党にたいする歴史的評価と同様、SEDの政治的総路線と深くかかわっており、それに規定されている。しかし、問い直されなければならないのは、まさに現在のSEDの路線ではないだろうか。

一九二九年のベルリンにおける血のメーデーから、四週間後に、その同じヴェディングでドイツ共産党の第一回党大会が開かれた。この大会で、テールマンはドイツの経済的・政治的状况を説明し、それがまさに「国際的規模のあらゆる矛盾の激化」という特徴をもっていることを指摘した。⁽³²⁾ このような客観的情勢から、階級的対立が激化し、「プロレタリアートとブルジョワジーの間の階級闘争、労働者階級の活動の強化、その革命化が、現在、資本主義をゆさぶり、崩壊させる重要なファクターになってきている」ことをテールマンは報告し、こ

のような基盤に立って党が担うべき戦略的課題は何か、を述べている。「労働者階級の多数派を共産主義のために獲得すること、改良主義に対して今まで以上にはげしい闘争をおこなうこと、下からの革命的統一戦線を実現させること、広汎な動労大衆のなかにプロレタリアートのヘゲモニーを実現させること。」がそれである。

この重大な課題は「KPDがボルシェヴィキ化を今まで以上に断乎遂行」するとき、はじめて可能になる。ボルシェヴィキ化の組織上の実践として何よりも重要なことは、経営内に党細胞をつくり、「主要な経営ならびにその他の経営における革命活動を行わしめる」ことである。テールマンは、労働者階級の多数派を獲得するためには組合内部での活動を強化する必要があることを、くりかえし説いている。改良主義的指導部にたいする闘争をおこない、個々の資本家を相手にする経済闘争から資本主義国家に対する政治闘争への展望をきりひろくために、必要なのが革命的労働組合反対派である。

ブレードルの『N & K機械工場』は、このドイツ共産党の政策の生きた模範を示している。

ブレードルは、当時経営細胞で働いていた党員たちの筆舌につくしがたい困難な日常活動を描いている。党員労働者たちによって、合理化が資本の利潤追求であることが暴露され、ソ同盟擁護の意味が明らかにされ、社会民主党とADGB指導部の正体が暴露されている。かれらは、経済闘争において骨身を惜しまない努力を傾け、スパイや買収を摘発している。どのようにしてRGOの労働者たちが、当時、経済闘争を政治闘争に結びつけていったかを、この小説は示している。共産党の労働者たちは、一五パーセントの賃上げがおこなわれないばあいはストライキをうつという提案によって、労働者の大多数派を味方することに成功する。共産党の労働者は、社会民主党の労働者評議会のメンバーが労働者誘導政策の報酬として二〇パーセントの割増出来高賃金をもらっ

ていることを摘発している。そして、これがたまたまの例外ではなく「社会民主党の、基本的に反社会主義的な国家擁護の政策」であることを明らかにしている。このような暴露、さらには、警察の介入、IAHの支援、失業者の連帯行動などは、ストライキに参加した労働者たちに、かれらの闘争がすでに一経営内の経済要求の枠をはみ出していることを、知らさずにはおかない。

『N & K 機械工場』は、こうして当時のドイツ共産党の組織活動を内容的に表現し、そうすることによってまた組織活動の歯車のひとつとして機能した小説であった。この小説は、レーニンの意味での党文学にはかならない⁽³³⁾。現在のBRDには、中途半端なプロレタリア・ルポルタージュの文学（ヴァルーフ）は存在しても、このような党文学は存在していない。またDDRでは、テールマンのドイツ共産党の革命的伝統に結びつけうとする志向は、歴史記述におけると同様、文学においても、否定されている。しかし、こんにち、何よりも必要なのはまさにこのような党文学ではないか。

一九二九年以降の経済恐慌のなかで、ドイツの労働者階級はますます貧窮化し、小市民層もますます没落していった。他方、国家機構は、社会民主党の消極的というよりはむしろ積極的な援助の下に、ますますファシショ化していった。そういう状況のなかで、ドイツ共産党は、一九三〇年八月、『ドイツ人民の国民的・社会的解放のための綱領』を発表し、さらに翌年一月には「人民革命」のスローガンを打ち出した⁽³⁴⁾。これは、当時の経済危機のなかで、農民・小市民など、人民のすべての被抑圧層を、階級意識にめざめたプロレタリアートの指導下に、同盟者として獲得しようとしたドイツ共産党の革命政策であった。プロレタリア独裁を抛棄するものではな

く、プロレタリア独裁の重要性がはっきりとしているからこそ、同盟政策が必然的なものとして考えられたのである。さらに、労働者階級以外の被抑圧者層の困窮を利用して、ファシズムが急速に勢力を拡大してきているとき、ドイツ共産党のこの同盟政策は、この上なく現実的な、アクチュアリティをもつものであった。

この同盟政策の文化戦線における表現が、党とBPRSによる、大衆文学の創造という要求であった。上述のO・ビーハーは一九三〇年にくりかえしこういつている。⁽³⁵⁾

文学は支配階級の重要な権力手段のひとつである。支配階級は、文学によって何百万人との大衆に影響を及ぼし、かれらの歩みに大衆を参加させている。われわれはいままでブルジョワ階級のトップレベルの文学にばかり、攻撃の狙いをつけてきた。これはまちがっていた。毎朝、駅の待合室と電車のなかで読まれ、捨てられている、何百万という部数をもつ、俗悪大衆文学は、階級敵の支配の道具であり、けっして無邪気なものではない。それは、大衆の意識をむしばみ、混濁させる危険な害毒である。階級敵のこの文学と闘うためには、われわれはわれわれの大衆文学を創出しなければならない。この要求の実現の第一歩が、最近の赤色一マルク小説シリーズの刊行である、と。

つまり、赤色一マルク小説は、階級闘争の新しい段階において、党とBPRSの自己批判から生まれなければならないものである。その成功は、その自己批判の正しさを裏書きするものであった。

さらに一九三一年一〇月には、ベッヒャーは、この赤色一マルク小説の成功に甘んじてはいけな、と強くいましめている。そして、プロレタリア革命文学をさらに発展させるためのたたかいを宣言している。プロレタリア革命文学にとっていま何よりも必要なものは、「きびしい、容赦なき批判」であり、この批判は「公然と」

おこなわれなければならない、とベッヒアーは書いて⁽³⁶⁾いる。

思想的にも芸術的にも高度な質をもった大衆文学の創造がプロレタリア革命文学には必要であり、それをいっそうおしすすめるためには、BPRS内部にいつその批判||自己批判が必要である、というこのような要請を受けて、というよりはむしろそれに便乗して、『リンクスクルヴェ』誌上にプロレタリア革命文学批判の論文を書いたのが、ルカーチである。ルカーチの『ヴィリー・ブレーデルの小説』(三一年一月号)にはじまる一連のプロレタリア革命文学批判の論文は、⁽³⁷⁾このような背景を抜きにしては全く考えられないものである。

ルカーチの書評『ヴィリー・ブレーデルの小説』が載っている一九三一年一月号の『リンクスクルヴェ』は、当時のドイツ共産党の政治闘争を反映している。主要巻頭論文は、ハンス・ギュンターの『ソヴィエト・ドイツが生まれなければならない!』という論文であり、ギュンターはこの論文で全般的危機を打破する革命の必然性を説いている。またK・クレーパーが『われわれは農民小説を必要とする』という論文を書いており、小農や農村労働者がしきりにナチスにとらえられていく状況のなかで、労働者階級の同盟者であるべきこの層を獲得するため、農民を扱った共産主義大衆小説が書かれなければならないことを訴えている。J・K・ケーニヒの『エックハート牧師とわれわれ』は、個人主義的な反共ブルジョワ・インテリゲンチヤの批判であり、同じようにビーハの『エッガーブレヒトの小さな計画』という小論文も、『ヴェルトビューネ』に巣くう「小ブルジョワ的個人主義・俗物文士気質」のインテリを痛烈に批判したものである。またこの同じ号に載っているヴィットフォードの論文は、ファシズムによるヘーゲルの「遺産相続」の虚偽を暴露する論文である。

このような一連の論文のなかに、ルカーチのブレーデル批判の論文は置かれている。かれのプロレタリア革命文学攻撃は、自己批判を装い、うまく全体の中にもぐりこんでいたからこそ、当時まだ総攻撃を食わずに済んだのである。

ルカーチのブレーデル批判に関する評価は、ヘルガ・ガラスのやっているように文学技術の「進歩」との関係においてなされるべきものではなく、ドイツ共産党の政策との関係においてなされるべきものであろう。そのとき、はじめて、『N & K 機械工場』批判におけるルカーチの政治的立場が明らかにされる。KPDの革命的同盟政策——その文学的表現が赤色一マルク小説である——にたいして、ブルジョワ的階級有和政策を文学的カテゴリーのオブラートに包んで打ち出してきたルカーチの階級的立場が明らかになる。ルカーチの路線は、テールマンの中央委員会の同盟政策とはおよそ似て非なるものであったし、またディミトロフの人民戦線戦略とも、似ても似つかぬものだった。

ルカーチは、ブレーデルの小説が「ドイツのプロレタリア革命の発展の中で重要な地位を占めるもの」であり「すべての労働者の利害の中心的なテーマ」を階級闘争の立場からとり上げたものである、と一応評価のポーズをとっている。しかし、とルカーチはいう。ブレーデルは、他の多くのプロレタリア作家に共通する、文学的・政治的な欠点を示しており、「KPDとコミンテルンの革命的な実践と理論のトップレベルの仕事」にくらべると、かれの小説は劣っている。ブレーデルの小説は、「経済主義的」とみなしうるような特徴をもっており、その政治的視野が狭く、「全国民的な問題のなかから、重要なモメントのひとつをとり出すのにとどまっている。」そうルカーチはいっている。「経済主義」というレッテルを貼りつけることによって、極左的偏向の烙印を押そ

うとルカーチはしているのだ。

ブレーデルは「革命をおしすすめるために克服しなければならない困難な諸問題を、書くことなく、消し去っている」とルカーチはいう。ブレーデルは「よい労働者を革命運動から遠ざけている、あの抑制、小ブルジョワジーの下部の、プロレタリア化された層を反革命へ追いやっている、あの流れ」をリアルに描いていない。「この大衆がイデオロギー的啓蒙に到達するために歩まなければならない道が、いかに困難なものであるか」を示していない。ブレーデルの小説は、共産主義者による大衆獲得のプロセスの「歪曲された描写」にとどまっている。ブレーデルの小説には、その困難なプロセスが一切書かれておらず、でき上がった結果だけが提出されている。「はじめは無党派派の労働者がある日『突然』共産主義者になる。いままで不十分な活動しかおこなっていない細胞が『突然』ストライキの指導を引き受ける。集会では、いつもおきまりのように、ボスに対する革命路線がすんなり通ってしまう。」そうルカーチは書いている。

ほんとうにルカーチのいうとおりだろうか。それをこんどは検討してみよう。

ルカーチのブレーデルならびにプロレタリア革命文学批判における、重要な概念は、全体性と弁証法という二つの概念である。全体性とは、ルカーチのばあい「全体のプロセス、現実の自己運動、現実のプロセス」である。プロレタリア革命文学も、他の敘事文学と同じく、この全体性を反映するためには、個々の部分が全体の一部を形成しているような、一種の閉された敘事詩的構成原理をとらなければならない、とルカーチは考える。ブレーデルは、なるほどかれの小説に正しい枠を置き、労働者の資本家に対する闘い、国家権力の介入、経営内の労働者の党派性、社会民主党と組合の役割……といったものを全体のプロセスの部分として描くことに成功している。

しかし、ブレーデルのばあい、その枠は「たんなる枠、たんなる図式、たんなる輪郭」に終っている。なぜなら、ブレーデルの小説には弁証法が欠けているからだ、とルカーチはいう。「ブレーデルは、結果だけを示しており、抑制・困難・反動を伴うプロセスを示していない。」大部分のルポルタージュ文学がもつ欠点をブレーデルの小説もまた示している。「小説をいきいきとさせるもの、つまり、生きた人間、生き生きと変化する人間関係、プロセスをもったほんとうの人間関係が、ブレーデルの小説には完全に欠落している。〔…〕ブレーデルの小説の人物には発展がない。せいぜい、急変するだけである。」⁽³⁸⁾

ルカーチは、『N & K 機械工場』のなかでは政治的事件がすべてプロセスとして描かれておらず、たんなる結果として示されている、というが、果してそうだろうか。小説に即して検討してみよう。

問題の労働者集会で、工場の労働者たちは経営者側の出した合理化案を多数決によつてはねつけることに成功する。賃金を固定したままで就労時間を延長させようとする経営者の要求は拒否され、この要求を労働者に吞ませようとした社会民主党の経営評議会の連中は「経営者の手先」「経営者の傭兵」であることが暴露されている。ブレーデルは、労働者たちがかちとつたこの成果を、けつして「結果」として示してはいない。ルカーチのいうのととは全くあべこべに、この集会での成功にいたる困難なプロセスは、一步一步、読者が追体験できるように描かれているのである。

まず、小説の冒頭で、企業内の勢力配置が示され、経営評議会のポストを握っている社会民主党員が共産党の経営細胞の活動にとって大きな障害になっていることが明らかにされる。小説の主人公で、新規に採用された旋盤工であるメルスターは、細胞に属する労働者のひとりから、まず経営内の勢力関係を教えてもらっている。

「そこで教えてほしいんだが、おれの隣にいる仲間はどういう連中だい。」

「ゴリゴリの社民ばかりさ。とくに、おまえの後にいるオルブラハトはタチのよくねえ奴だ。あいつには氣をつけることだ。」

「でも、どうしてここでは社民ばかりの経営評議会ができているんだ。」

「おれたちは自由労働組合の集会で少数派だった。そのくせおれたちはやつらをこっぴどくやつけたものだから、やつらは比例選挙を承知しなくなり、おれたちを追いつめにかかってきたのさ。」

「独自の候補を立てなかったのか。」

「立てたとも。しかし、選挙は自由労働組合の経営集会の中でだけやられたんだ。あそこではおれたちはいぜん少数派で、社会民主党が労働者評議会をそっくり握っていた。」

「じゃあ、まともな経営評議会選挙ではなかったわけだ。」

「その通りだ。」

「おれたちの細胞は何名ぐらいだい。」

「二八人だ。」

「おれを入れると二九人だな。」

「そのほかに赤色救援会に約四〇名、国際赤色救援会にもちょうど同じくらい味方がいる。向うは、どいつもみんなおそろしく旧弊な社民ばかりで、この土地に生まれ、死んだらこの土地に骨を埋めたいと思っている連中だ。」

「ハンス、おれはのっけから出しゃばらねえことにするよ——まず根を生やすことだ。」⁽³⁹⁾

ブレーデルは社会民主党員の頑迷さをけって個人的性格にしていな。かれらが、物質的な利益のために経営にしばりつけられていること、労働者がかれらと対決することになると、そのばあいかれらはきまって経営の利害を代弁することを、ブレーデルは明らかにしている。

また、物語の進行のなかで、経営評議会のメンバーは、会社から二〇パーセントの手当をもらっていること、これはちょうど出来高賃金の最高額に相当する額であることなどが明らかにされる。

経営細胞は、会社が抜きうちに工場集会を召集して労働者をだまそうとしているのを察知する。経営者側は、旋盤部門に、超勤制度の導入による一種の合理化をおこなおうとして、出来高賃金の新しい査定方法——これは現実には出来高賃金の「削減」を意味するものだった——を提案した。このとき、共産党の労働者たちは、逆に賃上げ要求の絶好のチャンスが来たと判断する。合理化案を組合に吞まそうとする会社は、交渉に応じてこないわけにはいかないからである。経営細胞は要求を出すことに決め、決議文の草案をつくる。このようなプロセスのなかで、読者は、労働者のいままでの賃金の実態がどのようなものであったかを知らされる。

「おれたちは、他の工場の木工よりも二〇プフェニヒから三〇プフェニヒ安い日給しかもらっていないのだ。こんどの賃金協定を結べば、おれたちは賃上げ要求をチョロまかされることになるんだ。賃金はほとんど上らず、土曜日の午後も働かなければならないことになるんだ。」⁽⁴⁰⁾

このようにして、経営細胞は周到に工場集会のための準備をしている。ルカーチのいうように、集会で「突然」勝利をおさめているのではけっしてない。

経営集会の数日前に、注油作業をしていたクレーン係がクレーンの歯車にまきこまれる労災事故にあっている。「上の通路に数名の金具工が並んで負傷者を引き上げた。やがて下の方も騒々しくなってきた。たちまち、いたるところで、責任がだれにあるのか議論されはじめた。」〔…〕

『あいつ自身の責任だ。あいつが軽率だった。』

『いや、あれの責任じゃねえ。ここの工場がいつもおれたちをせっつきすぎるからだ。いくらおれたちが急いで仕事をして、遅い遅いっていうんだ。』〔…〕

『なぜ、クレーンの注油は、仕事の始まる前か、それとも終ってからにしないんだ。』とメルスターは訊ねた。オルブラハトは、親指と人差指で『金だ、金だよ』というような手ぶりをしてみせ、にやっと笑った。⁽⁴⁾

この事件は、RGOの指導するストライキの直接の原因にはまだなっていない。しかし、これをストライキとは無関係であるかないかのように考える文学批評家だけが、小説の中に弁証法が欠如しているなどというごたくを並べるのだ。

何とかして事態を会社側の有利なようにもっていかうとする職制は、労働者に十分な準備を許すまいとして、わざと前日になってはじめて、組合集会の通知を掲示する。

しかし経営細胞は、手を拱いていなかった。一方では決議案をつくり、もう一方では経営新聞を準備している。集合の朝、経営新聞『デア・ローテ・グライファー』が三百部、工場の入口の門のわきで配られた。それは一大センセーションをひきおこした。「さながら爆弾が工場へ投げこまれたかのようにだった。〔…〕いたるところで労働者たちがこれを読み、議論した。大笑いして賛成する労働者もいれば、口汚く罵倒する者もいたが、いたる

ところで『デア・ローテ・グライファー』とその記事内容が話題の中心にされた。⁽⁴²⁾

こういう準備のあとではじめて集会がおこなわれているが、この集会そのものが、経営内部の闘争を反映している。

先ず労働者評議会が、労働者たちに会社の合理化案を提示する。これは会社による労働者への攻撃であった。社会民主党の評議会は、はじめから会社に賛成しているが、労働者の支持をとりつけなければならず、そのために全く事務的な態度をよそおい、ひとりの労働者が指摘しているように「一見じぶんたちの意見をもたないかのようなふりをしている。」

経営者側の労働者にたいするこの要求に対して、労働者たちから会社への要求が出される。労働者のこの要求を明確化するのが経営細胞の仕事であり、経営新聞『デア・ローテ・グライファー』の機能もそこにあった。

「会社は、会社の利潤を高めるためにあらゆることを計画している、とおれたちは聞かされる。ところが、いくら耳をすまして聞いていても、おれたちは、賃金の引上げについては何ひとつ聞かしてもらえねえ。しかもおれたちは、毎日、新聞で、どんなに物価指数が上っているかを読んでいるんだ。会社がアメリカ式の労働方式をとり入れようっていうんだったら、会社はアメリカ式の賃金を出さないうそだろう。」そうひとりの労働者はいっている。⁽⁴³⁾

また別の労働者は、経済問題を政治との関連において明確につかまえている。

「株主たちはしこたま利潤を吸い上げているが、労働者には何の利益も与えられず、搾取がひどくなり、労働者は負担をしいこむ一方だ。そして、何千・何万人という労働者が、利潤追求のこの合理化によって、職を失

っていく。⁽⁴⁴⁾」

会社と労働者の間の階級対立の中で、中立をよそう連中は、片っぱしからその虚偽を暴露されていく。

「われわれは、われわれとちがう意見をもつ仲間を犯罪者とみるべきではない。われわれは、どんなことば、どんな意見にも、常に一片の真実があることを知らなければならない。」というひとりの博愛主義的労働者の発言は、労働者の戦闘意欲を眠り込ませる言動であるため、却けられている。⁽⁴⁵⁾

いちばんきびしい攻撃を受けているのが、社会民主党の経営評議会である。かれらはおとくいの経営民主主義の理論を展開する。

「戦争に負けたのだから、ドイツ国民は、戦勝国へ莫大な賠償を払わなければならないし、経済を復興させるためには、非常な困難を忍ばなければならない。」——『だれの経済なんだ。』(….)『その上、現実には世界市場には外国の競争相手がいって、ドイツの工業は全力を上げて奮闘しなければならなくなっている(….)われわれの共和国がこんなにちたいへん不平等・不公平な状態におかれていることは、誰の眼にも明らかだ。しかし、諸君、考えてみてくれ。社会主義の労働者階級がこの共和国を倒したら、どんなことになるか。(….)責任がだれにあるかは、いまあえていわないことにする(….)われわれは、現実主義者でなければならない。現実をありのままみなければならぬ。事実をそのあるがままに表現することがだいじだ、とラサルもいつているではないか。われわれは、いまきびしい決心をしなければならない。会社の合理化案を検討しつつ、しかしできるだけ労働者の有利になるように、事態を解決していかなければならない。』

——『まるで経営者の手先だ』とひとりの労働者が叫んだ。⁽⁴⁶⁾

RGOの提案は、評議会の露骨な抵抗と作意的な会議の運営にもかかわらず、それを押しきってついに票決にもちこまれ、ぎりぎりながら過半数の賛成を得る。反対派はとうとう労働者の多数派を獲得することに成功したのである。これは、経営評議会としては、夢にも予期しない結果であった。だから、この瞬間に社会民主主義は思わずその本質を暴露してしまう。

「議長席の連中は愕然とした。このとき、シューマッヘルはとんでもないへまをやった。当惑と激怒のあまり、かれは顔を真赤にして会場の労働者たちに向って叫んだ。『お前たちは好きなように勝手に決議するがいい。評議会は、何をしなければならぬか、ちゃんと知っているんだ。もう会社とだって話がついているんだ。』」

何ともいいようのない大騒動がはじまった。⁽⁴⁷⁾」

以上の引用と分析から、ブレーデルは「結果だけを示しており、抑制、困難、反動を伴うプロセスを示していない」というルカーチの批判が見当ちがいであることは、すでに明らかであろう。いかにも共産党員労働者らしい的確さ、熱意と沈着さをもって、ブレーデルは、ストライキ闘争がいかに組織されていたか、そのプロセスをあざやかに描き出している。

しかし、こういうプロセスは、どうやらルカーチの考えている「プロセス」ではないらしい。ルカーチは、ブレーデルの小説の人物が「生きていない」、ただ「外面」だけが描かれている、と不満を述べている。しかし、ブレーデルの小説の人物はじつに生き生きとしている。かれらは、ストライキ闘争の局面で、怒り、とまどい、嘲笑し、連帯感を示している。しかし、こういう真率な感情もまたルカーチの求めているものでないらしい。

少し後、三二年六月号の『リンクスクールヴェ』に載せた『傾向か、党派性か』という論文で、ルカーチは、文学

作品における弁証法についてのかれの考えをいっそう詳しく説明している。弁証法的に書くということは、ルカーチによれば、小説のなかの要素を、ただプロセスとして示すだけでなく、全体の一部として形成することである。「なぜなら、作家による現実形成そのものは——もし作家が現実を正しく、弁証法的に、反映しようとするのであれば——具体的・現実的に階級闘争から生まれる諸要求の運命を、客観的現実に統合された要素として、客観的現実から生まれ客観的現実に働きかけるものとして、内包していなければならないからだ。⁽⁴⁸⁾」個々の要素は、つねに全体性によって統合される部分として表現されなければならない。「なぜなら、作家の主張は、この現実そのものの自己運動に統合される部分であり、同時にこの現実の自己運動の結果と前提だからである。」

したがって、ルカーチによれば、プロレタリア革命文学の創作においても、現実の矛盾を矛盾として示すことではなく、矛盾を全体のプロセスの中へ止揚することが肝心だ、ということになる。ブレーデルの小説にみられるように階級闘争の展開を反映することではなく、階級闘争の統合を——現実の自己運動の一部として——反映することが革命的プロレタリア作家の任務だ、ということになる。

ここでわれわれは、ルカーチがブレーデルの小説の人物に求めていたものが何であったかを、理解できるように思う。小説の人物に「弁証法」が欠けており、「たんなる輪郭」だけが描かれている、とルカーチがいうとき、ルカーチは、ブルジョワ教養小説の主人公がじぶんの全運命を反省する内面生活のプロセスを伴って登場することを期待しているらしい。

ルカーチは、部分の全体性への統合というかれの理論を、共産党宣言を援用しながら説明している。共産主義者の党派性は、共産主義者が、一国内のプロレタリアの闘争においても、インターナショナルなプロレタリアー

ト全体の利益を主張する点、プロレタリアートとブルジョワジーの闘争の歴史的発展段階において、運動全体の利益を代表する点にある、と宣言はいつている。この主張から、ルカーチは、部分の全体性への統合というかれの芸術理論を導いている。しかし、一九二八年—三一年の階級闘争の政治的現実はいかに無視されている。だから、かれの反映論は、三〇年にレンツが、文学における経済主義に反対して主張した、マルクスレーニン主義の立場に立つ反映論とは、まるでちがっている。ルカーチにとっては、革命的階級闘争は解決されなければならない矛盾としてではなく、予定調和的に存在する高遠な統一性の部分として現われるべきものである。三〇年、三一年のドイツの革命的階級闘争にとってルカーチの発言がいったいどんなアクチュアリティをもったといえるか。アクチュアリティどころか、これはまさにその正反対のものであった。

ルカーチとはちがってブレーデルは、階級闘争を——「統一性の部分」としてではなく——徹頭徹尾、矛盾として示している。ブレーデルは、マルクスレーニン主義の立場から、労働者階級の経済闘争を政治闘争の部分として示しており、またかれの二つ目の赤色—マルク小説『ローゼンホフ街』にみられるように、革命的な労働者階級の闘争が労働者階級だけの解放のための闘いではないことを示している。しかし、ルカーチとはちがって、小説の人物の階級的性格をばやかすようなまねをけっしてしてはいない。

ブレーデルの小説の人物は、階級のない社会を先取りしているような「全体性」というものが全体の「プロセス」としてどこかにあって、このプロセスに組み込まれていくべき人間ではない。ブレーデルのわいているのは、革命闘争のなかのストライキ闘争において、それを闘い抜くプロレタリアである。「KPDとコミンテルンの革命の理論と実践のトップレベルの仕事」を理由に、それにくらべるとブレーデルらのプロレタリア革命文学

の作家の仕事はレベルが低いものときめつけるルカーチは、たとえ何百遍レーニンの名を引合いに出そうと、レーニンの意味での党文学のあり方を真向うから否定している。ルカーチは、文学の質の強化が党の指導下におこなわれる労働者階級の闘いの前進の一部としてしかありえないこと、この労働者階級の闘争への作家の参加はまさにその文学の質の強化を意味していたことを、否定している。『N&K機械工場』のような小説の政治的機能と文学的価値をきり離してしまうことは、およそ非マルクスレーニン主義的な文学論であろうが、ルカーチはまさにそれを要求したのである。

この小説の政治的機能は、自主的にたたかわれたひとつの経済闘争の階級的必然性を説明すること、資本家の利益を守るためにスト破りを組織するADGBや警察力を導入するSPDにたいして、共産党と社会民主党の労働者の統一戦線をつくる必要性を訴えること、ファシズムの手先である社会民主党の役割についての理論（社会ファシズム論）を説明しつつ、しかも極左的偏向を批判していくことなどにあった。

では、小説のこのような政治的機能にたいして、それを表現する文学的手段は、それにふさわしいものであったろうか。これが次の問題である。ルカーチのブレード批判も、どこよりもこの文学的手段の問題にそのほこ先を向けている。

小説のなかでは、会社の会計事務所に、ひとりのシンパの女性があり、かの女がRGOにいくつかの重要な情報を提供している。こういう人物の書き方は正しいだろうか。また「全く偏狭な社会民主党員」であったブレックマンが、最後には階級意識にめざめ、共産党の労働者が全員解雇されたあと、みずからRGOに立候補してい

るが、かれの政治的生長・変化が小説では十分に説明されていない、とはいえないだろうか。労働者のなかでは政治的におくれた部分である木工労働者たちがRGOの味方になるが、どのような政治的アジテーションによってそれが可能にされたのか十分に書かれていないのではないか。

こういう風に、小説のフォルムの問題を、その政治的機能との関係において、しかも階級闘争の具体的な歴史的状况に即してとり上げるのであれば、それは大いに意味のあることであろう。ところが、問題をそのように立てないで、ルカーチや最近ではガラスなどがやっているように、モンタージュ技法は事物の本質をとらえることができるかどうかなどと、抽象的なレベルで論じることはおよそ無意味であろう。

文学の表現形式に関してルカーチが、プロレタリア革命文学——ブレードルやオットヴァルトの小説——にたいしておこなった批判は、ほぼ次のようにまとめることができる。

文学・芸術は、どのような技法をもってすれば人生の諸現象を正しく表現することができるか、つまり、諸現象を表現しつつ、その物質的原因である本質が認識されうるようにすることができるか。モンタージュの技法や自然主義的技法によって現象と本質の間の矛盾が表現されうるか。できない。なぜなら、それは自然発生性・直接性にとどまるからだ。それができるのは、トルストイやマンやバルザックがその手本を示したようなリアリズムだけである。

ルカーチのこの批判によってプロレタリア革命文学は決定的にその弱点を暴露された、と考えているのがヘルガ・ガラスである。

「ルカーチのブレードル批判は、プロレタリア革命文学の弱点をあばき出した。これまで『リンクスクルヴェ』

誌上でもこれほど公然とこの弱点が指摘されたことはなかった。この弱点は、けっきょく、すべての革命文学が解決しなければならぬひとつの困難な問題——論文・報告・科学的分析などによって先ず言語的に表現された政治的洞察をどのように文学にとり入れるべきか、という問題——に他ならなかった。プロレタリア革命文学は、この困難をかなり手っとり早いやり方で克服しようとした。プロレタリア革命文学は、報告や論文を小説のなかへとり入れることによって伝統的な意味での行為をつくろうとした。しかも、登場人物をこの報告の『担い手』にして、この人物にかれらの行為に絶えず政治的コメントを加えさせるか、あるいは小説のなかの事件について作者が読者に説明したいと思う見解があれば、それを他の作中登場人物に託する、というやり方をしたのである。プロレタリア革命文学の小説は、行為を組み立てるのに古くさい発展小説の図式を踏襲している。つまり、外的な年代記、事件のつながり、作中人物の『進歩』などを採用しているが、個々の行為の心理的結びつきと心理的伏線、連続性と『進歩』における心理的動機づけなどを用いていない。⁴⁹」

このような考え方をもってすれば、KPDのじっさいの政治闘争は、すべて、コミンテルンの上層部のイデオログが大衆とはかけ離れたどこかの密室で予め考え出した理論を天降りのに実施させることになってしまう。革命的労働者の統一戦線を組織するために当時の共産主義たちが現実には一切無視されてしまふ。ブレーデルの描いているようなストライキ闘争が現実にあったことは理解されない。年代記は、現実のストライキ闘争の経過ではなくて、小説の構成のための材料でしかない。

ルカーチやガラスの文学理解とはまさに正反対に、労働運動と革命党の文学は、歴史的現実を文学の本質となしうる点にその最大の強みをもっている。歴史を素材にして小説を書いたブルジョワ作家のなかでは、トーマス

・マンやフォイヒトヴァンガーはそれなりにすぐれた作家であった。しかし、これらの作品がその構成や心理学においてどれほどすぐれていようと、労働運動と革命党の文学には到底及ばない。

「プロレタリア文学の強みは、まさにその高度の現実的内容にある。ブルジョワジーとその文学が、階級的利害のためにあるがままの現実を、表現はおろか直視することさえできないのにたいして、革命的プロレタリアートはそのような偏狭さを知らない。むしろ革命的プロレタリアートは、社会秩序を根底から変革しなければならぬという必然性に根ざしたその階級的利害から、この社会秩序を、その全ての現実を、およそ可能なかぎり完全に、認識せざるをえないのである。⁽⁵⁰⁾」

このような意味で、ブレーデルは、すぐれたプロレタリア革命文学作家であった。ブレーデルは、その一生を、ドイツ共産党が時代の各局面にくりひろげた戦略に応じた実践的・組織的な闘争のために献げた。第一次大戦中、社会民主党の青年組織の一員だったかれは、非合法の反戦アジテーション運動をおこなっている。二三年のハンブルク蜂起に参加したあと、遠洋貨物船に金具修理工として働いたが、その中で細胞をつくり、また海上労働者の生活と闘争をルポタージュした労働者通信を党の新聞に載せた。「ナーゲル・ウント・カンペ機械工場」の旋盤工となったかれは、ここでも、経営内のストライキを労働者通信として書いたため、解雇されている。

ついで党の地方機関紙『ハンブルガー・フォルクスツァイトゥング』の編集者として七年半活動したが、二九年のベルリンのメーデー事件について書いた記事と北ドイツの非合法軍事産業を暴露した報告のため、二年間の禁固刑に処せられた。この獄中に書かれたのが二つの赤色一マルク小説、『N&K機械工場』と『ローゼンホーフ街』である。

『N & K 機械工場』は、この時期の数多くのプロレタリア革命文学の小説のなかでも、もっとも徹底的に、政治的現実を小説の内容として示した小説である。その点では、A・シャラー、L・トゥレクラの小説はもとより、H・マルヒヴィツァの小説をもしのいでいる。組織的労働運動・党の役割というものの重要性をこれほど明確に表現している小説は、——ゴツチュの『三月の嵐』をのぞけばほかにはないであろう。⁽⁵²⁾

『N & K 機械工場』は、労働者たちが階級意識にめざめ、政治的に教育されていくためには、共産党員の不斷の努力が必要であることを示している。労働者を苛酷な運命につきおとす合理化の本質は何か、経済的危機——老ヨーンの自殺の真の原因はこれであった——の本質はいったい何か、SPDやADGBのボスたちの偽瞞にみちた言動の背後にかくされている本質は何か、これを共産党の労働者たちは暴露しなければならぬ。この本質は、ルカーチのばあいそうであるように何か資本の自己運動のようなものとして現われてくるものでなく、労働者たちによって政治的に暴露されなければならない。

「ある日の午後、経営監理部は、掲示によって、今までよりも合理的な労働の方法を採用する方針を発表した。掲示文には、パセティックな仰々しい言葉で、世界市場における競争が必要なこと、販売市場を確保し拡大するためにはドイツが競争に勝たなければならないことが書かれていた。合理化は、ドイツ経済が生きのびるためには絶対なものである、労使はお互いに協力してわが国の破壊された経済を再建しなければならない（……）」と書かれていた。金具工のドローンはアジテーションのため東奔西走した。この合理化の原因は、世界市場競争に勝とうとしているドイツの資本家たちがつくり出しているものである、とドローンは労働者たちに説明して廻った。合理化案にに応じて、労働者のなかから出てきたが本質的には消極的な内容しかもたないような、いくつかの

提案を、かれはことごとく論駁し、プロレタリアートの革命的闘争だけが、しかも広汎な基盤に立つ階級対階級の闘いだけが、労働者の経済的立場を改善し、資本主義を屈服させるものであることを証明した。⁽⁵³⁾」

「社会民主党は、プロレタリア革命を残忍なやり方で弾圧したが、それだけではない。あの時以来こんにちまで、資本主義国家の強力な支持者になり、ブルジョワジーの階級的武装権力のありとあらゆる手段を行使して、労働者のすべての革命的意志を残忍なやり方で弾圧している。死にかかっている資本主義のなかでファシズムがはたす役割は、プロレタリアートのすべての革命的勢力を野蛮なやり方で弾圧しながら、資本主義を延命させることである。⁽⁵⁴⁾」

小説のなかで、このような正確な政治的暴露が、作者のことばとしてではなく、活動的な経営細胞労働者のアジェーションとして示されていることは注目に価する。このような暴露は、党の革命的な理論と実践に結びつき、それをじぶんたちの仕事とする経営細胞によっておこなわれるのであって、豊かな才能をもつ作家の個人的能力として表現されているのではない。

ルカーチも、資本主義社会の現象を解明し批判するものはマルクスレーニン主義以外にないことを認めている。しかし、ルカーチのばあい、それをおこなうのは創造性豊かな個人である。

「批判は、作家たちの実際の創作を批判するだけに終ってはならない。むしろ——われわれの全遺産を解明することによって——時代の必然的な発展傾向を、みずから独自に、認識し、実現させるために、必要とあれば、作家たちの実践に逆らっても、尽力しなければならない。⁽⁵⁵⁾」というのがルカーチの立場である。

「重要なレアリストにとっては、二重の、芸術的でもあり世界観的でもある、作業が生まれる。すなわち、第

一にかればこのような諸連関を思想的に暴露し、芸術的に造形しなければならない。第二に、しかしかれは——第一の作業と不可分であるが——抽象化された諸連関を芸術的に陰蔽しなければならぬ。つまり、抽象の止揚である。このような二重の作業によって、新しい、造形によって媒介された直接性が生まれる。⁽⁵⁶⁾」

作家は、現象と本質の暴露を「コミンテルンやKPDの……トップレベルの仕事」にしたがって、おこなわなければならぬ。しかし、ふたたびそこから実生活へ戻って芸術的造形をしなければならない、とルカーチはいう。しかもこうした作業はすべて才能豊かな個人によるというのだ。創作の過程が党の活動や大衆と結びつきうるものであること、結びつきうるどころか、プロレタリア革命文学は本質的にそういうものであったことをルカーチは無視し、否認している。

以上の考察から明らかなように、ルカーチのばあい——ガラスなどのばあいはいうまでもなく——プロレタリア革命文学の表現形式の問題はその政治的内容から切りはなされている。なぜか。政治的内容そのものをガラス同様ルカーチもほんとうはみとめていないからだ。一方で内容をもとめないで、他方で形式をその内容にふさわしくないものとして批判するというのは、むしろすじが通っていないが、ひとつのトリックであろう。

ルカーチや「左翼」リベラル文学者のブレーデル批判に共通しているものは、『N&K機械工場』の文学表現には生き生きしたものがないという主張であり、何よりも、この小説の言語は硬直した党官僚的な言語に終始している、という点にかれらの攻撃は集中している。工場の内部や集会の中で労働者の語ることはすべてみずみずしい生命を欠き、「党新聞の言語」そのものである。そればかりでなく、闘争を離れたプライベートな対話さ

えもが「党活動家用語」で埋めつくされている。このような党用語ではほんとうの人間らしさは表現されえない、というのがルカーチやリベラル「左翼」の批判である。

ブレードルの『N & K 機械工場』の言語にたいする批判は、その他にもさまざまな政治的立場からなされており、必ずしも一律に論じることとはできない。そのなかには、小説の言語を問題にしなが、実は当時のドイツ共産党のアジテーションを敵視する政治的立場からの批判——これがほとんど大多数であるが——もあれば、後述するベッヒアーのばあいのように、党のアジテーションを図式的・形式的なものに終らせまいとする、同志的な批判もあったからである。

リベラル派は、この小説の言語を、作者が稚拙な泥くさいものに焼き直して労働者に語らせているだけの、共産党新聞用語であり、芸術的には低級なもの、とみなすであろう。また社会民主主義者は、モスコウの手先である共産主義者がコミンテルンの指令を受けてドイツの現実を無視した政策を逐行するためにつかう、ひからびた官僚的言語とみるかも知れない。いずれにせよ、かれらに共通しているのは、本質的にはプロレタリアート憎悪の政治的立場からする言語観・芸術観である。かれらの多くは民衆の「自然な」ことばの愛好者であり、「あるがままの」、労働者の「生きた」言語を推奨する。たとえばA・デーブリンが『ベルリン・アレクサンダー広場』（二八年）に書いたような言語がかれらの尊重する言語である。「大都会の密林からきこえてくる自然の響き」（エーレンツヴァイク）として、この小説は当時もブルジョワジャーナリズムでは騒がれ、もてはやされた。しかしプロレタリア革命作家同盟の作家たちはたちどころにこの小説の本質を見抜いた。

「デーブリンは、この小説によって、プロレタリアートの階級闘争にたいする、かれの公然たる敵意を表現

した。この小説では、政治活動をする労働者はほとんど描かれていないが、描かれているばあい、政治活動をする労働者が階級意識にめざめた労働者の言語を語ることをしていない。労働者の語る言語は酒場の隠語ばかりだ。デブリーンは、資本との政治的・経済的対決によってはじめて明確に形象化される現代の労働者を、一種のシニズムで、軽蔑し、嘲笑しようとする意識的に試みている。⁽⁵⁷⁾」

現在も後を絶たないリベラル派のプロレタリア革命文学（とりわけ『N & K機械工場』）の文学表現にたいする攻撃は、こうしてすでに一九三〇年に作家同盟の作家たちによって完膚なきまでに批判されているのである。

現在、リベラル派や社会民主主義者の批評以上に問題なのは、現代修正主義者のそれであろう。ルカーチはいわばその元祖のひとりであり、現在のDDRの文学者の多くがこれを継承している。そのひとつの例をあげよう。

「登場人物の描写はかなり堅苦しいものであって、ニーナ・クリシューッツが次のようにいうとき、われわれは同意しないわけにはいかない。『人間の自然がもつ多様性と、闘争におけるこの多様性の表現は、ブレーデルの『N & K機械工場』には反映されていない。だから、ブレーデルは共産主義労働者の生き生きとした姿を創作できなかった。このばあい、ブレーデルが——また同様に労働者階級の他の多くの作家たちが——人民の言語の豊かさを十分に採用しなかったこと、十分な言語手段を用いて作中人物の相貌とその言語を個性化することを知らなかったことを、見逃すわけにはいかない。作中人物の話し方には個性が欠如しているが、それは、政治活動をおこなう労働者の間にいわゆる党の言語があまりにも広がりすぎていたことから説明されよう。⁽⁵⁸⁾』」

人民の言語と党の言語とは相い容れないものだろうか。人民の言語というものは、階級闘争をたたかう労働者

の言語とは別の、一般的な豊かな人間の自然な本性の発露でなければならない、というのだろうか。飲んだり食ったりする「日常生活」においては、科学的社会主義の用語は邪魔な異質物になるのだろうか。

一九三〇年にプロレタリア革命文学作家同盟の作家たちの間では、言語の問題は全くちがった角度から検討されていた。一九三〇年一〇月、ベッヒアーはハリコウ会議でこの問題をとり上げている。ベッヒアーは、革命的大衆文学を創造するのに「党言語」が障害となる可能性があることを指摘し、同盟の作家たちの注意を促している。⁽⁵⁹⁾ 革命的プロレタリア大衆文学は、階級敵によって不断に操作・工作されている大衆読者への道をきりひらかなければならない。小農・農業労働者、プロレタリア青少年、没落した小市民などが、反革命の予備軍として組織されるようなことがあってはならない。反対に、かれらを共産主義大衆文学によって獲得しなければならない。そのためには、文学に「ほんとうの人民の言語」が必要である、とベッヒアーはいつている。ベッヒアーは、プロレタリア革命文学とその読者層が閉鎖的なサークルになってしまう危険のあることを警告している。プロレタリア革命文学に「ドグマチックな硬直性」が支配的になれば、プロレタリア革命文学は「みずからすすんで敵の捕虜」になってしまう。暗号のような、事情に通じている人びとにだけ理解される「党言語」は有害である。文学の言語は、人民革命の水準にまで高められなければならない。現在、毎日、各方面の戦線において資本金家収奪と警察弾圧にたいしてゲリラ闘争をたたかっている大衆の感情と情熱が文学に表現されなければならない。文学の言語を人民革命の水準にまで高めるといことは、ポピュラーに書くということにほかならない、とベッヒアーはいつている。

「人民革命」は、たんなる掛声としての政治スローガンではなかった。策略や打算では毛頭なかった。それは

すぐれた政治的問題であり、また文学の言語表現の問題でもあった。ベッヒアーをはじめBPRSの作家たちは、徹底した正直さをもってこの問題に取り組んだのである。プロレタリア革命文学の作家たちが誠実であっただけに、党と作家同盟の同盟政策に便乗したルカーチは卑劣であったといわねばならない。ルカーチは、このベッヒアーのハリコフ会議の報告から一年後の三一年一月号の『リンクスクルヴェ』にブレーデル批判を書いているわけだが、その中で、ブレーデルの小説の「新聞言語」を批判し、まさにこの言語に小説の欠陥がもっとも顕著にあらわれている、といっている。

ルカーチは、『N&K機械工場』の経営細胞のアジテーターがつかう言語を、左翼セクト主義的で図式的なものとみなしている。アジテーションをするのに、「ピストルをぶっ放すように」このような言語を口にして、ためらっている社会民主党員に襲いかかる共産党の活動家は、かならず失敗するであろう。アジテーションを大衆の経験に結びつけない活動家は、いたずらに観念的な言動に突走るであろう。そのような図式的なアジテーションが『N&K機械工場』にまさに再現されている、とルカーチはいつている。

ルカーチの、このような小説評価にたいして、作家同盟の内部からむろん反論が出てきた。オットー・ゴツチエは、ルカーチの批評を反駁するのに、ルカーチの批判に大衆批評を対立させた。かれはじぶんの足で労働者たちの間を廻ってアンケートをとってみた。

「ブレーデルは小説の人物に少し党の用語を話させすぎるとは思わないか。労働者たちはもっとちがったことばで話しているだろう。」

「何だって？ 別の話し方なんかしてやしねえよ。もうちょっと大げさで、ねじまげた話し方はしてるかも知

れねえが、そんなことはねえ。あんたは、何十万もの活動家や、階級意識をもつ労働者組織に加っている何百万人も労働者がこんなふうには話さねえ、とでも思っているのかい？ 連中はまさにこの党ことばを話しているんだ。おれたちがより多くの仲間を獲得すればするほど、こういうことばが話されるようになってきているんだ……」

この返答を根拠に、ゴツチュはこう結論する。「事實はこの答えのとおりである。何十万人も党活動家、何百万人も労働者がじじつこのようなことばを語っているのだ。これはかれらのことばなのだ。」⁽⁶⁰⁾みずからも労働者で、党の活動家のひとりであったゴツチュは、じぶんの経験から、党言語は階級意識にめざめた労働者のほんとうの言語である、と信じて疑わなかった。大衆がじぶんたちの運命をじぶんたちの力できりひらいていこうとするのであれば、この水準に達しなければならぬ、とゴツチュは考えた。このように、党言語と人民の言語を統一させようとした、この共産党員の意図は何であつたろうか。それはルカーチの考え方とどうちがつていたろうか。そもそも、党言語とは何であろうか。言語に党の言語、階級的言語といったものがありうるだろうか。

「言語は意識と同じくらい古い。——言語は、実践的な意識である。言語は、他の人間にとつても存在する、したがって一人の人間にとつて向自的にもはじめて存在する、現実的な意識である。言語は、意識と同じく、他の人間との交通の必要・必須ということから生まれる。」⁽⁶¹⁾

プロレタリアートが即自的な階級として存在するかぎり、プロレタリアートの意識は支配階級のイデオロギーによって規定されざるをえない。現実の経済的・社会的諸関係は支配階級の意識において神秘化され、偽瞞化さ

れる。この意識は、資本主義が帝国主義的段階に入るとますます倒錯し、腐敗したものになっていく。帝国主義の本質の隠蔽、倒錯した反映がブルジョワジーの意識と言語に支配的なものとなり、さしあたりは、労働者階級の意識と言語もこれによって支配される。

しかし、労働者階級は、日々抑圧を身をもって体験している。経済的収奪・労働強化・失業等を通じて、資本主義の個々の局面を認識し、個々の資本家にたいする防衛戦のなかで、資本主義的弾圧のきびしさを知らされるようになる。労働者階級は、こうして社会的生産と私的所有の間の根本的な矛盾をみとめるようになる。しかし、その矛盾は、まださしあたりは現象として表現されるにすぎない。しばしば、労働組合運動やストライキ闘争などによって部分的な一時的成果がえられはするが、永続的全面的な政治闘争によってのみほんとうの成果が可能であることが忘れられる。

労働者階級の闘争が歴史的に普遍的なものになってきたなかで、マルクスとエンゲルスが理論化したのが科学的社会主義である。この理論によって、またプロレタリアートの闘いの戦略・戦術を指導する共産党の出現をまっけてはじめて、プロレタリアートの経済的防衛闘争は国家権力を奪取する政治闘争へと変っていき、労働者階級は向自的な存在となった。こうして資本主義の本質にたいする科学的認識が可能になり、プロレタリアートが階級意識にめざめてくるにつれ、プロレタリアートのなかには、科学的社会主義のさまざまな概念をとり入れた固有の言語が生まれた。

階級的言語というものは存在しないかも知れない。しかし、一定の社会の言語は、そのなかに必らず階級の存在を反映している、といってよいであろう。

ブルジョワ社会においては、自然科学——これはブルジョワジーによって發展せられ、ある程度までは世界の事象の本質を説明することに成功している——を除けば、社会科学においても、ブルジョワジーの階級的利害が貫かれており、ブルジョワ国家の経済的・政治的諸関係を神秘化し、瞞着するイデオロギーや言語が支配している。しかし、認識活動が、社会的・階級実践として営まれ、事物の社会的本質を把握するために高次の機能をになうにつれ、言語にも階級的 성격が鋭く示されるようになる。言語の階級的性格は、階級対立が明確に認識されればされるほど、明確なものになる。下部構造における資本主義的矛盾、そこから生まれ、ますます公然化する階級闘争、プロレタリアートとその同盟者のなかに根をおろした前衛党、労働者階級のなかに入り込んだブルジョワジーの手先などが明確に認識されればされるほど、そうである。

一方では、階級闘争そのものが不断の認識過程にはかならない。労働者階級は、階級闘争を通じて、社会的現象の原因やその法則性を、直接的・感性的に経験しながら、きわめていくであらう。

他方、この認識過程における重要な理性的補助手段になるのが科学的社会主義の諸概念である。マルクス・レーニン主義の諸概念がなぜ科学的であるかといえば、それは、その諸概念が事物の社会的歴史的本質をとらえて正しい関係のなかに置き、政治的・経済的に正確に把握させるからである。

これにたいして、ブルジョワ社会科学の諸概念は、事物の社会的・歴史的本質を隠蔽し、恣意的な関連のなかにおこうとする。なによりもそこでは、事象の感覚的側面と理性的な側面とが分離させられる。そうすることによってはじめて労働者の搾取が可能になるからである。

それとは反対に、この分離を弁証法的に止揚していくのが、科学的社会主義の理論であり、革命闘争の実践で

ある。事物を感性的かつ理性的にとらえること、それは弁証法的・統一的な認識におよそ不可欠なプロセスであろう。事象の感性的・直接的な認識——たとえば合理化、解雇などの経験——は、それが科学的に普遍化され——たとえば、私的所有と社会的生産の間にある資本主義の根本矛盾として理論的に理解され——るとき、はじめて完全なものになりうるであろう。感性的な経験は、それが理性的認識によって、系統化され組織化されない限り、展望もなにもないような感情に終るほかはない。

これと同じことが、党言語と人民言語の関係についてもいえないだろうか。三〇年ごろBPPRSの共産党の作家たちが、苦勞して追求したのは、まさにこの党言語と人民言語の統一だった。

「プロレタリア革命文学作家同盟に加っている同志たちは、たいてい密接に党活動と結びついており、活動家であるため、党言語をかんたんに文学創作の中へ持ち込んでしまうことが多い。また多くの者が、事情に通じた人びとだけが判読できるような、硬直した、不明瞭な図式をつかって書いている。かれらは象形文字のような難解な言葉をつかっている。しかし、われわれが、上述のような層の人びとに宣伝をしようとするときにこそ、われわれは、文学作品からこのような党言語を、その内容を失うことなく、捨て去る必要がある。党言語を書きかえ、ほんとうの人民の言語であるような言葉に直して語りかける必要がある。人民の言語のもつ力強さ、生命力と具象性をもった言葉、党用語を知らない人にも理解できる言葉、読者・聴衆に、押しつけではなくかれら自身によって、われわれの運動を理解させることができるような言語が必要である。このような言語を創造することは、戦争の危険が迫ってきて、非合法の時期がおとずれれば、そのとき革命文学には大きな役割が与えられるため、とりわけ重要なことになるであろう。」

「ほんとうの人民の言葉」のもつ「力強さ」は、この言葉が日々の階級闘争の中から生まれ、多様な現象を、感性的に、自発的・戦闘的に表現しうる点にある、とベッヒアーは考えている。マルクス・レーニン主義の科学と人民大衆のもつ豊かな創造性の結合、これを一九三〇年に共産党の作家たちは追求したのであった。ドイツで「人民革命」はもう一步のところで実現しなかったし、プロレタリア革命文学はその課題を果たしたとはいえないかも知れない。しかし、赤色一マルク小説はその任務を担っていた。

ここでもう一度、ルカーチの『N & K 機械工場』の言語にたいする非難を考えてみよう。ルカーチは、小説の言語の「不自然さ、活力の欠如」をいい、この点に「創作の無能ぶりがもっとも顕著」であると述べていた。ルカーチにいわせると、小説の「新聞報告式言語」は、演説ややじなどを表現する箇所、集会や細胞新聞などで政治的内容を叙述する箇所などでは、個人的ニヒアンスを表現していないうらみはあっても、まずまず適当なものである。しかし、「ブレードルがこの言語を集会・会議・報告以外にも使用するとき、いっそう始末の悪いことになる。」とルカーチはいい、そのような例として、「労働者たちがラジオを聞いている。するとひとりの女性共産党員が『ラジオは支配階級のメガフォンであり、これによって刻々何百万人も人間が操作され、愚昧化されている』⁶³」⁶³という箇所を挙げている。

ルカーチのこの批評からわかることは、ルカーチが「政治的」な領域と私的・個人的な領域をきれいに分けてしまっていることである。「政治的」な領域では、小説の「図式的な」言語は——このばあいには「政治的な内容」を強調する」必要があるから——適当であり、「無能ぶり」は問題になってこない、というのである。ルカーチのこの論理にしたがえば、政治的内容はもっぱら政治活動の領域へ押し込まれ、個人の肉体的な生長・発展はも

つと自然な行動の領域へ、私的・日常生活的領域へ押しやられることになる。

しかし、政治的な領域と私的な領域を区別し、分離する傾向こそが、アジテーションを図式的なものにするのではないか。アジテーションが明確で説得力のあるものになるのは、それが日常的・感性的な体験に根ざしたときであり、日常的行為と政治的行為がしっかりとつながっているときではないか。まさにそれをBPRSの作家たちは追求していたのだ。

ルカーチのように政治的な領域と私的な領域を分離することは、文学作品に反映される真実の内容を階級的・党派の立場からきり離すことにほかならない。ルカーチが、帝国主義時代のデカダンスの文学、ブルジョワ・リアリズムの小説にすぐれた文学的反映を認め、これをプロレタリア革命文学の手本として推奨したのは、そのためであった。

一九三一年にルカーチによってはじめて提出されたこの修正主義的傾向は、一九三五年以降、いわゆる社会主義陣営のなかでも、広く強く生きのびるようになった。

しかし、プロレタリア革命文学の伝統が失われることはけっしてないであろう。

注

- (1) この問題に関しては『社会評論』創刊号(1975年)に書いた小論を参照していただきたい。
- (2) Klaus Neukrantz, *Barrikaden am Wedding*. Berlin (West), 1971, S.74.
- (3) Willi Breidel, *Maschinenfabrik N. & K. Ein Roman aus dem proletarischen Alltag*. Wien/Berlin/Zürich, (Internationaler Arbeiter-Verlag), 1930.

- (4) O. Biha, Die proletarische Literatur in Deutschland. In: "Literatur der Weltrevolution" Moskau, 1931. Nr. 3. S. 74.
- (5) Helga Gallas, Marxistische Literaturtheorie. Neuwied/Berlin, 1971.
Fritz J. Raddatz, Traditionen und Tendenzen. Frankfurt a. M., 1972.
- (6) Arthur Rosenberg, Geschichte der Weimarer Republik. Frankfurt a. M., 1961.
Ossip K. Flechtheim, Die KPD in der Weimarer Republik. 1948.
- (7) Helga Gallas, a.a. O., S. 20.
- (8) H. Gallas, a.a. O., S. 21.
- (9) H. Gallas, a.a. O., S. 176.
- (10) H. Gallas, a.a. O., S. 178.
- (11) N. Kraus (= Josef Lenz), Gegen den Ökonomismus in der Literaturfrage. In: "Die Linkskurve" 2. Jg. Nr. 3., S. 10 ff.
- (12) Erich Steffen, Die Urzelle proletarischer Literatur.
- (13) Helga Gallas, a.a.O., S. 50.
- (14) Becher, Einen Schritt weiter! In: "Die Linkskurve" 2. Jg. Nr. 1., S. 1 ff.
- (15) Preisausschreiben der "Linkskurve" a.a. O., S. 8.
- (16) N. Kraus (Josef Lenz), a.a. O., S. 11.
- (17) H. Gallas, a.a.O., S. 52.
- (18) H. Gallas, a.a.O., S. 52.
- (19) たとえばレーニン, 『なにをなすべきか? われわれの運動の焦眉の諸問題』参照
- (20) ファシズムに敗れたKPDは, 1939年のベルン会議で「民主主義共和国」の樹立をプログラムに掲げ, 人民戦線の政策を追求したが, 帝国主義国家においてファシズムを根絶するということは何を意味するか, 新しく樹立されるべき国家の階級的な性格はどういうものであるか, 明確にされなかった。(Die Berner Konferenz der KPD. hrsg. v. K. Mammach, Frankfurt a. M. 1974)

しかも, 戦後——全くちがった歴史的状況において——「反ファシズム・民主主義の秩序」と「ブルジョワ民主主

義の完成」がKPD=SEDの政治路線となった。

他方、すでに1934年にスターリンは、ソ連には、生産手段の国有化と農業の集団化によって、階級対立が存在しなくなったと述べている。(J.W. Stalin, Über den Entwurf der Verfassung der UdSSR und Rechenschaftsbericht an den XVIII. Parteitag, In: Fragen des Leninismus, Moskau 1947, S. 616ff. u. S. 708)

(21) H. Gallas, a.a.O., S. 52.

(22) Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung—Chronik—Teil II. Berlin, 1966 S. 252 f.

(23) H. Gallas, a.a.O., S. 52.

(24) H. Gallas, a.a.O., S. 83 f.

(25) H. Gallas, a.a.O., S. 83.

(26) 主なものとして、次のような書物が挙げられる。

Zur Traditionen der sozialistischen Literatur in Deutschland—Eine Auswahl von Dokumenten. Berlin/Weimar, 1967.
Aktionen/Bekenntnisse/Perspektiven. Berlin/Weimar, 1966.

Traum von Rätedeutschland. Berlin/Weimar, 1968.

Beiträge zur Geschichte der deutschen sozialistischen Literatur im 20. Jahrhundert. 4 Bde. (v. Klein, Kändler, Albrecht u.a.), Berlin/Weimar, 1970.

(27) プロイセン警視総監グセジンスキーによって、治安を危くするとの理由で禁止処分の根拠にされたのは、1930年版の最後の頁 (S. 160) である (“Die Linkskurve”, 1931/9) が、この箇所と1952年版の相当箇所 (S. 352) とを比較すれば、ちがいがよくわかる。

(28) Georg Lukács und der Revisionismus—Eine Sammlung von Aufsätzen—Berlin, 1960.

(29) このシリーズは、20年代から50年代までのドイツや外国のプロレタリア革命文学を集めたものであったが、明らかに範を赤色—マルク小説にとっており、Bredel の Maschinenfabrik K & N はその Nr. 1 であった。

(30) Lexikon sozialistischer deutscher Literatur. Leipzig, 1964.

(31) DDR の政治経済を論じた注目すべき著作としては次の両著がある。

- Phillip Neumann, Zurück zum Profit—Zur Entwicklung des Revisionismus in der DDR. Berlin (West), 1973.
- Uwe Wagner, Vom Kollektiv zur Konkurrenz—Partei und Massenbewegung in der DDR. Berlin (West), 1974.
- (32) Ernst Thälmann, Die politische Lage und die Aufgaben der Partei. Protokoll des 12. Parteitags 1929, S. 49 ff..
- (33) W. I. Lenin, Parteiorganisation und Parteiliteratur, In: Lenin, Werke, Bd. 10.
- (34) Ernst Thälmann, Volksrevolution über Deutschland—Rede auf der Plenartagung des ZK der KPD vom 15.–17. 1. 1931—In: Reden und Aufsätze 1930–1933. Köln, 1975.
- (35) O. Biha Die proletarische Literatur in Deutschland. S. 115.
dito, Die proletarische Massenroman. “Die Rote Fahne” 2. 8. 1930. In: Zur Tradition der sozialistischen Literatur in Deutschland.
J. R. Becher, Die Kriegsgefahr und die Aufgaben der revolutionären Schriftsteller. In: Zur Traditionen...
- (36) J. R. Becher, Unsere Werbung. “Die Linkskurve” 1931. Nr. 10.
- (37) G. Lukács, Willi Bredels Romane. “Die Linkskurve” 1931 Nr. 11.
Gegen die Spontanitätstheorie in der Literatur. 1932 Nr. 4.
Reportage oder Gestaltung. 1932 Nr. 7.
Aus der Not eine Tugend. 1932 Nr. 11/12.
- (38) G. Lukács, Willi Bredels Romane. S. 24.
- (39) W. Bredel, Maschinenfabrik N. & K. S. 7 f.
- (40) Willi Bredel, a.a.O., S. 15.
- (41) Willi Bredel, a.a.O., S. 16 f.
- (42) Willi Bredel, a.a.O., S. 21.
- (43) Willi Bredel, a.a.O., S. 25.
- (44) Willi Bredel, a.a.O., S. 26.
- (45) Willi Bredel, a.a.O., S. 27.

- (46) Willi Bredel, a.a.O., S. 27 f.
- (47) Willi Bredel, a.a.O., S. 29.
- (48) G. Lukács, a.a.O., S. 20.
- (49) H. Gallas, a.a.O., S. 120 f.
- (50) A. Kurella, Die Organisation der revolutionären Literatur. In: Zur Tradition der sozialistischen Literatur in Deutschland. S. 319.
- (51) Adam Scharrer, Vaterlandslose Gesellen. Berlin/Wien. 1930.
A. Scharrer, Der große Betrug. Berlin/Wein. 1931.
A. Scharrer, Maulwürfe. Malik-Verlag, 1933.
Ludwig Turek, Ein Prolet erzählt. Malik-Verlag Berlin 1930.
- (52) Otto Gotsche, Märzstürme. Berlin 1954.
- (53) Willi Bredel, a.a.O., S. 58 f.
- (54) Willi Bredel, a.a.O., S. 64.
- (55) G. Lukács, Gegen die Spontaneitätstheorie. a.a.O., S. 31.
- (56) G. Lukács, a.a.O.
- (57) O. Biha, Herr Döblin verunglückt in einer "Linkskurve" In: "Die Linkskurve" 1930 Nr. 5.
- (58) Lilli Bock, Willi Bredel. (Schriftsteller der Gegenwart Nr. 12) Berlin, 1969. S. 19 f.
- (59) J. R. Becher, Die Kriegsgefahr und die Aufgaben der revolutionären Schriftsteller. a.a.O.
- (60) Otto Gotsche, Kritik der anderen—Einige Bemerkungen zur Frage der Qualifikation unserer Literatur. "Die Linkskurve" 1932 Nr. 4.
- (61) K. Marx, Die Deutsche Ideologie. In: MEW Bd. 3. S. 30.
- (62) J. R. Becher, Die Kriegsgefahr...
- (63) G. Lukács, Willi Bredels Romane. a.a.O., S. 24 f.